

グリーンスパンのアイン・ランド・コネクション 1

——我あり，ゆえに我思う¹——

村 井 明 彦

- I グリーンスパンという神話
- II マンハッタン・マン——輪中の内側で
- III 盲点をつくアイン・ランド——資本主義はまだ成立していない
- IV 弱点をつくアイン・ランド——グリーンスパンの反デカルト的転回

I グリーンスパンという神話

I.1 グリーンスパンという神話

アラン・グリーンスパン (Alan Greenspan 1926-) は、生きながら一つの神話になった。このような人物はそう多くはいない。しかし、このことが彼に関するさまざまな語り、いくつかの点でかなり偏ったものになっている。

1926年3月6日に生まれたグリーンスパンは、1987年8月11日にボルカー (Paul Volker 1927-) のあとを受けて第13代連邦準備理事会 (FRB) 議長に就任し、2006年1月31日まで約18年6ヶ月間在任した。1914年に議長職が設けられてから今までの最長在任期間は第9代マーティン (William McChesney Martin 1906-1998) の約18年10ヶ月で (1951年4月2日～1970年2月1日)、これを数ヶ月しか下回らない。大統領の任期は、1951年に憲法修正22条で三選が禁止されて最大8年になったから、18年は驚くほどの長さである²。ただ、在任期間がほぼ同じでも、現役を務めた年齢はマーティンが44歳から63歳までなのに対してグリーンスパンは61歳から79歳までと、高齢の議長であった³。だが、私たちは彼が高齢者だとしばしば感じただろうか。おそらくそうではあるまい。発言には、わかりやすさはないが奥行と威厳があり、まるでシナイ山で俗人にはわからない神の言葉を受けたあとそれを民に宣託として告げるモーセのような話しぶりだと述べた人もいる (Sechrest 2005)。そうかと思えば、まったく別の意味で年

1 本稿は、今号より全3回にわたり掲載される。次回からの副題 (予定) を記す。2 中央銀行を嫌う中央銀行家の肖像、3 「根拠なき熱狂」講演の根拠。なお、以下で「本稿」とは次回以降の稿も含む。
 2 1935年銀行法で理事の任期は一期4年、最大14年と定められたが、前任者が任期満了前に辞任した場合の残存期間分は例外で、かつ大統領が次期候補者を指名するまでは、現任者が留任する。
 3 第10代バーンズは就任時に65歳と高齢だったが8年しか在任せず、現職のバーナンキは52歳、第12代ボルカーが51歳で就任している (ボルカーはグリーンスパンより1年若く、その退任後にグリーンスパンが就任している)。

齢を感じさせない要素もある。一つには、若いころプロのジャズマンだったり、20代で結婚してすぐ離婚したあと独身を通していったのに70代でTVキャスターと結婚したり、威厳もしくは地味さとどういうわけか矛盾なく共存する一種の軽さもしくは派手さがある。二つ目に、この結婚やなお健在の冷静な話しぶり、よくテニスをするなどの健康そうな日常生活の送り方である。こうした横顔はどれも、歴代議長と比べてときにグリーンスパン固有のかなりユニークな一面であるが、改めて指摘されることが少ないのは不可解である。モーセが現代に生まれ変わったら、グランドピアノやクラリネットを演奏し、テニスをし、誰もが知っている美人と結婚しただろうか。神話性の要因は、まずはこうした経歴、生活、人柄の一種独特の組合せにある。

むろん、議長としての仕事ぶりが十分貢献しなければ、これらだけで神話の雲に包まれたとは考えられない。まず、1987年のブラックマンデーの事後処理によって名をあげ、就任直後からマスメディアに注目される条件が整っていたところへ、1990年代後半にインフレなき持続的成長が史上最長に近づく¹と神格化が始まった。つまり、グリーンスパンはほとんど神様扱いされるようになった。ところが次に、2000年代に入って当初低金利で信用が緩んだ状況が続いたあと変動型の住宅ローン金利が上がってサブプライムローン危機が生じると、史上最大のバブルの発生と崩壊をお膳立てしたとの非難が浴びせられることになる。つまり、神様から一転して悪魔呼ばわりされることになったのである。

人が神話化されるための条件はいくつかあるが、いずれにせよ、まずどこかの段階で神にならなければならない。むろん、最低条件がいきなりこれならば一般人には最初からおよそ無縁な世界であるが、利にさといメディアが演出するというのも事実である。だとすれば、より注目すべきなのはその後の経過であろう。コースはおそらく3つに分かれる。第1に、神と呼ばれ続ける人物である。これは最も難しく、それだけに稀である。第2に、オーラが剥がれて「ただの人」に格下げされる人物である。この例がいちばん多い。第3に、一転して悪魔になる人物である。こうなるのは、第1の場合とは別の意味で難しい。それに、第2の場合とは似ているようで異なる。脱神話化は、神が人間界に墮ちる場合には神話の終わりを意味するが、悪魔に転ずる場合はその逆転劇自体が別の神話となる。つまり、最初の神話からの脱却とともに新たな神話、神話の第2幕が切って落とされるのである。しかも、良かれ悪しかれ第1の場合よりも神話に奥行きと陰影が出てくる。グリーンスパンはこのケースに属する。

さて、こうして神と悪魔の両極端にまたがる振幅の大きな神話が展開する中で、まったく前例のないことが起こる。早くも1990年代後半から非専門家（大学の経済学者ではなくジャーナリストや投資アドバイザー）による「グリーンスパン本」が立て続けに出版されるのである。この現象は特に『ワシントン・ポスト』の著名記者ウッドワード

の『マエストロ』で勢いを増し、辞任後もなお止まらない。⁴ 再び歴代議長と比較すると、ほとんど大統領なみの扱い、または芸能人扱いといってもよい。⁵ ところが、これらグリーンズパン本の内容は賞賛か非難かに分かれる傾向があり、この点で「偏り」をもつ。つまり、神話化プロセスは今なお進行中で、すでに完結した物語として語る事ができないのである。しかし、グリーンズパンは高名なエコノミストではあるが評論家でも学者でもなく実務家であり、在任中は当然としても、就任前にまとまった著作を公刊していない。⁶ つまり、彼の思想や経済学が何なのかを確定するための資料は基本的に不足していた(または、散在して一般人の目に触れにくかった)のである。

ここから、あるたいへん奇妙な結果が生じた。すなわち、多くの本が書かれており、中には彼の思想形成や思想遍歴を詳述したものもあるものの、こうした背景の解明がグリーンズパンの個性ある金融政策の解明に十分役立てられることはなく、高名なエコノミストの経済学が一体どういうものなのかという肝心の点については確たる結論を得られないままなのである。この傾向は日本で特に強いように思うが、欧米でも根本的な違いはない。あっさり言ってしまえば、その有名さにも関わらずグリーンズパンとは誰なのかをほとんど誰も知らないのである。毀誉褒貶が相半ばする人物は、その真の姿がわからないことがままある。また、連邦準備の秘密主義がその扉の内側にいた人物を謎めかせることも事実である。さらに、「フェドスピーク」(Fedspeak)とか「グリーンスピーク」(Greenspeak)などといわれるグリーンズパン特有の周到な韜晦語法も、彼の発言の真意や彼が巻き起こした出来事の真相解明を困難にしている。しかし、グリーンズパンはアメリカでも大統領に次ぐ(見ようによってはそれ以上の)権力を持つといわれるFRB議長だった人物であり、退任後の活躍も含めると20年以上も世界のメディアが取り上げ続けた人物である。だとすれば、これはほとんどミステリといってもいいような事態ではなからうか。何度も姿を目にし、声を耳にするが、誰かがよくわからないというのが事実なのであれば、その人物こそ最も深い神話の霧に包まれているというほかあるまい。

4 Beckner 1996; Sicilia and Cruikshank 1999; Kahaner ed. 2000; Martin 2000; Rich 2000; Woodward 2000; 伊藤 2001; Tuccille 2002; Batra 2005; Canterbury 2006; Hartcher 2006; Fleckenstein and Sheehan 2008; Sheehan 2009.

5 もともと母や親戚も音楽好きで自らもジャズバンドの一員になったことに始まり、テレビキャスターの現夫人アンドレア・ミッチェルと結婚する前にも、1970年代にはやはりキャスターのバーバラ・ウォルターズとつきあってきたから、芸能・メディアの世界とのつながりは生涯を通してのものであり、グリーンズパンの人生の目立った特徴の一つである。

6 最近のFRB議長のうちボルカーは同様だが、バーンズやバーナンキなど学者上がりの議長には就任前にすでに研究書があった(Burns and Mitchell 1946; Bernanke 2000)。いずれにせよ、最近出た『波乱の時代』(Greenspan 2007)で状況は一変し、今後は同書の記述を参照せずにグリーンズパン論を書くことは難しくなっている。しかし、経歴のピークを終えたあと80代で書かれた回顧録が最初のまとまった著作であることは、かえってその人生の特徴をよく表している。

I.2 本稿の課題

本稿では、そんなグリーンスパンを解明するというねらいの第1歩として、意外と知られていない一面から彼を読み解いていきたい。むろん、若いころスタン・ゲッツと競演したことがあるとか、高校がキッシンジャーと同じだったといった一面も興味は引くだろうが、この種の意外さをわざわざここで中心テーマとして言い立てるつもりはない。彼の基本的な経歴についてはいまやむしろ人口に膾炙しているといってもよく、この点で本稿に新しい説明はほとんどない。しかし、かなり重要と思われるのに、特にわが国では（少なくとも学術的な観点からは）光を当てられたことがない論点がある。それは、彼がオーストリア学派の経済学に影響を受けた一種のリバタリアンであること、それから金本位制の自動調整力をモデルに平時の中央銀行業務の目標をこの調整力の近似的再現においていたことである。本稿の直接の課題は、この2つの命題を論証することである。

おそらくこう述べると、意外だという反応と、ある意味で納得できる（ないし当然だ）という反応があるのではないかと思う。後者の根拠は、在任中に数度にわたってバブルを引き起こした「市場原理主義」（何とも曖昧でほとんど内容空虚な語であるが）の守り神なのだから、自由主義を信条とするのは当たり前ではないか、といったところであろう。しかし、それはせいぜい初めの命題の後半部分に関する評言にしかかなりえない。それに、思想の正確な理解ではない。まず政治思想面では、「リバタリアニズム」は「リベラリズム」と同義ではなく、広義のその一流派であると見なすこともできるとしても、狭義にはむしろ対立する側面ももち、また何よりも経済思想面でオーストリア学派のシカゴ学派との最大の違いが反中央銀行論（全廃論を含む）であることを見逃している。けれども、この違いは決定的なものである。あとの命題も、おそらく当然と受け止められる可能性は低いだろう。ハンフリー・ホーキングズ法が定める現代アメリカの中央銀行の使命には、失業の削減（経済成長）が含まれ、連邦準備が積極策によって国民経済の指揮者の役割を果たすことが求められているからである。

いずれにせよ、リバタリアンは中央銀行に対して基本的に不信感を抱いている。そして、グリーンスパンの場合は、中央銀行業務に重要な点での制限を課す思想を抱いている。グリーンスパンの政策思想を考察するときには必ずふれるべき問題は、世界でも最も影響力が大きい中央銀行の総裁を務めた人物がなぜこうした思想を奉じているのか、またそのことが彼の金融政策にどのような刻印を押しているかである。金本位制への憧憬や中央銀行の権限の制限という思想がグリーンスパンの思想の根底に流れていること

7 わが国では、小黒1987などが早期の伝記紹介の例で、その後も伊藤2001、土井2006などがある。とりわけ、Greenspan 2007のすばやい邦訳、『日本経済新聞』の「私の履歴書」に連載された自伝(Greenspan 2008)などにより、一気に情報が増えた。

は、この考え方が現代の中央銀行家がつもものとしていかに奇妙に見えようとも、紛れもない事実であって、これを否認することはできない。私たちがとりうる姿勢は、この事実から目をそむけるか、それをふまえて彼の政策を理解しようとするか、二つに一つである。そして、前者の途をとったグリーンズパン論は、例外なく表面的なものにとどまっている。

残念ながら、わが国では、自国の運命に及ぼす影響の多大さを考えると理不尽なほどアメリカの保守派政治思想の研究が遅れており、その経済政策形成との関係を扱う議論も、支持者からにせよ反対者からにせよマネタリズムを含む新古典派の周りに偏っているように思われる。しかし、アメリカの経済論壇は、移民でつくられた同国の歴史を背景に、共産主義国から国家社会主義国までを含む多様な国々出身の思想家たちが持ち寄ったさまざまなイデオロギーや信条が相互作用を繰り返して織り成された壮絶な戦場、絢爛たる一大絵巻であって、問題そのものがそれを扱う者に同国のイデオロギー地図の中での彼の立ち位置に関する正確な理解を要求するのである。これに応えるだけでも容易なことではないが、グリーンズパンの金融政策の執行原理の解明は、こうした迂回路を通した手法によってなされねばならず、それ以外の手法でなされてはならない。というより、それ以外の手法では不可能である。

また、海外の研究についてはのちに詳しく取り扱うが、主流派経済学（古典派系諸学派とケインズ派、つまりは教科書に登場する学派を指すものとする）の見解のみには、手短かにコメントしておこう。彼らの見解は、単年度のフロー分析という基本枠組みをもつ現代マクロ経済学をグリーンズパンの政策が生み出した集計値に適用してその得失を論ずるという基本姿勢を一步も出たものではない。こうしたフィルターをとおして彼の政策実績を分析した理論家はほぼ例外なくそれを賞賛するが、それはもっぱら物価安定や経済成長を持続させたからという理由による。他方で、大きなバブルを招いたことには非難が集中してしまう傾向にある。こうした一連の分析には、確かに誤りはないが、発見もまたあまりないのではなかろうか。なぜなら、成功したときも失敗した時も、その理由を解き明かすことがないからである。典型例は、彼の実績は素晴らしいが今後の政策の参考にはならないという、元FRB副議長ブラインダーの結論であろう（Blinder and Reis 2005）。けだし、執行原理が未解明であることの所産であろう。

本稿では、グリーンズパンの思想遍歴を跡づけることで、上に示した二つの命題を論証していきたい。

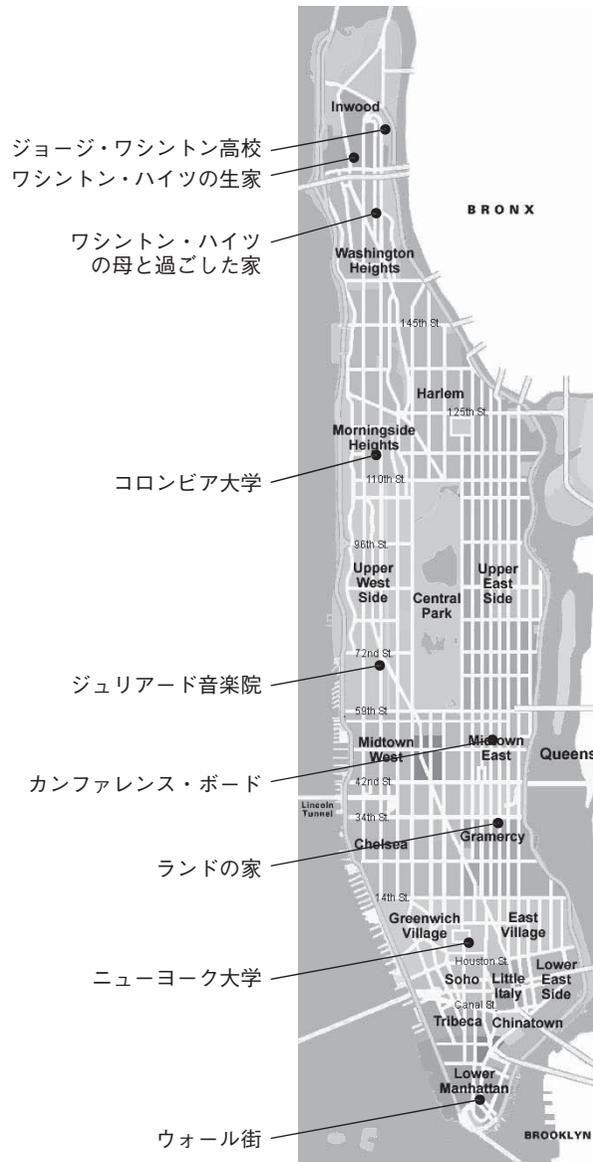
II マンハッタン・マン——輪中の内側で

II.1 マンハッタンという舞台とグリーンスパンの足跡

マンハッタンは海に突き出ているが、実はほとんどを川で囲まれた短冊形の島である。この島は幅約4 km、長さ約20 km、面積59.5 km²、現在の人口が約163万人である。人口87万を抱える世田谷区は面積が約58 km²とほぼ同じだが、人口密度を比べると、マンハッタンが1 km²あたり約2万7500人なのに対して、過密をもって鳴る東京で最大人口を擁する世田谷でさえ約1万5000人にすぎない。これは、中層以上の集合住宅が中心を占めるためにマンハッタンの容積率が高いからであろう。地名は明らかに英語起源ではなく、原住民の言葉から来ている。定説はないが、一説に「多くの丘のある島」の意味らしい。やはり島である。世界経済の中心地が島であることは、あまり意識されていない。かつてヴェネツィアは地中海経済の中心であったが、本島の面積はたかが5 km²ほど（第一期の関西国際空港島とほぼ同じ）だから、マンハッタンはかなり大きく、このため島であることが意識されにくいのであろうか。しかし、よく目にする海からの俯瞰ショットは、この島の光景が現代文明の高度な到達点を象徴し、アメリカの首都がワシントンであるとしても、それはたかがアメリカの首都にすぎず、ニューヨークはむしろ世界の首都であるということを示すに十分なものであろう。グリーンスパンはこの島に生まれ、彼の高校、大学、大学院、さらにはFRB議長以前の職場に至るまでが、すべてこの島の中にある（地図参照）。つまり、ワシントンに出仕した期間を除く生涯のほとんどの歳月をこの島の中で送っているわけである。この意味で彼は、生粋のニューヨーカーである。いや、市ばかりか州も指す「ニューヨーク」では広すぎるから、もっと限定して「マンハッタン・マン」と呼ぼう。マンハッタンは川に囲まれた輪中ではあるが、閉鎖的な輪中精神とは無縁で、世界中から第一級の人材が集まる特殊な島であって、むしろとても開放的である。今から明らかにするが、こういう特色をもつ島の中で完結した暮らしが、単なる生活史の一事実ではすまないほどの影響を、グリーンスパンの生涯、特にその思想に与えていると思われる。

まず、『波乱の時代』の自伝部分⁸などをもとにグリーンスパンの生い立ちを簡単に見よう。彼は、1926年に、ルーマニア系ユダヤ人ハーバートとハンガリー系ユダヤ人ローズ・ゴールドスミスとの間に生まれた。生家は、マンハッタン北端部のワシントン・ハイツ地区にある。地名は、マンハッタン島の中で最も標高が高いために独立戦争のとき

8 『波乱の時代』は、半分が自伝、残りは講演や議会証言などをもとにした経済論集である（自伝部分は邦訳ではほぼ上巻で完結）。なお、同書の参照指示の際には「AOT」と略記して原著ページ数を、そのあと「；」で区切って邦訳ページ数を記す。また、本稿をつうじて訳文は必ずしも訳書に従っていない。



筆者作成

<http://newyorkcity2005.web.infoseek.co.jp/information/citymap-j.html>

ワシントンが陣営をおいたことに由来する。移民が多い地区だが、ユダヤ系の中では中層以上の住民の街であったとグリーンズパン自ら述べている (AOT 19; 上巻 31)。兄弟はおらず、アランが5歳のとき両親が離婚し、家具店に勤める母に女手一人で育てられた。父はサラリーマンで、のちにウォール街で証券マンになる。ニューディール政策でアメリカが復興するとの希望を述べた『来るべき回復——1936年から先に経験することについて』という本も書いた (H. Greenspan 1935)。同書を息子に手渡す際に父は、「私のこの初めての努力はいつもお前のことを考えて進めてきたが、枝分かれして同様

の努力が途切れることなくつながり、お前が大きくなったら振り返ってこの論理的な予測の背後にある考え方を解釈し、自らこういう仕事を始めようとしてみることを願っている。お前のパパより」という言葉を書き入れて贈っている。FRB 議長になってから周りに本を見せると、曖昧な表現が父親譲りだというリアクションだったという。その父は再婚してブルックリン（マンハッタンの東のロングアイランドにある）に住み、定期的に面会していた。すぐ近くに住んでいた母方の従兄弟ウェズリたちとよく交流し、その父（母の姉の夫）で保険業のジェイコブ・ハルパートを実父のように慕っていたが、彼は父のいない生活の閉塞感のためニューヨークからの脱出願望が強まり、ラジオでなるだけ遠くの放送局に周波数を合わせたり、遠方と意思疎通が図れるモールス信号に憧れて覚えたり、時刻表を見て架空の旅を楽しんだりしたという。13歳のとき、父がシカゴ出張に誘ってくれ、ペンシルヴェニア駅から憧れの鉄道に乗り、途中ピッツバーグで製鉄所を見て感動した。のちに鉄鋼業の業況予測を仕事にするようになるが、当時花形だった重厚長大産業への関心がこのとき芽生えたという。小さいころから計算が得意なことが母の自慢のタネで、5歳のとき3桁の足し算ができたので大人の前で暗算を披露すると周りは大騒ぎになった。ただ、母がスターになっただけで、本人は目立つのを嫌う控えめな性格であった。グリースパンは、シカゴへの旅を期に「母の世界から抜け出したい」と思うようになったというが（AOT 19-23；上巻 31-34, 36-37）、片親で養育される生活に窒息感を覚えてしまったのだと思われる⁹。

その後、文武芸の三道に秀でた名門公立校ジョージ・ワシントン高校に進学する。同校の名もワシントンの野営地に由来する。ナチス支配圏から逃れてきたユダヤ系難民の子女が多かったことも関係してか、卒業生には途方もない才人が散見される。3人ほど紹介しておこう。まず、2年先輩にいたハインツ・キッシンガーもそんな難民の一人だった（ただし在学中には面識なし）。のちに華やかなアメリカ外交の表舞台で活躍した彼も、ドイツからマンハッタンにたどりついて名をヘンリ・キッシンジャー（1924-）

9 別のソースから、家族とその生活の背景を補足しておこう。ワシントン・ハイツは1906年の地下鉄開通で開け始め、1920年代の好況期に宅地化された。ユダヤ人が多いため、ゲッターで有名なドイツの大都市の名をとって「ハドソン川沿いのフランクフルト」（フランクフルトの正式名称は「メイン川沿いのフランクフルト」）と呼ばれた。1933年から1940年の間に同地区だけで2万人のユダヤ人を受け入れたという。ただ、他にもアイルランド系、ギリシア系移民が多かった。両親の離婚は若すぎた結婚と大恐慌による窮乏が原因らしく、アランは母に引き取られて母方の祖父母とともにやや南の西163丁目600番地に移り住むが、家は母と台所で寝るほど狭かったという（Martin 2000, 1-2）。

ニューヨーク市は5つの「区」（borough）からなり、マンハッタンはその一つである。1811年の州「委員会計画」によって、南北の「avenue」と東西の「street」でつくる格子状街区の都市計画が成立した（日本語では一般にそれぞれ「番街」「丁目」を当てるが、ときに混用される）。完全に格子状の街区の基点は現在の14丁目だが、遡ってヒューストン通りを基点に街区が不規則な13丁目までも画定された。終端がワシントン・ハイツ地区南端の155丁目であった。その後さらに北進し、現在では220丁目までである。なお、同島は北端部ではかなり幅が縮まり、グリーンズパンの生家も両親離婚後の家もマンハッタン島が東西1km強とかなり狭くなった地区にある。

と改め、何と髭剃り用ブラシ工場で働いて週 10.89 ドル稼いで 8 ドルを両親に手渡ししながら夜間部に通う苦学生であった (Martin 2000, 7)。また、ハンガリー生まれのユダヤ人で、プリンストン大に進んで同郷のフォン・ノイマンとともに「マンハッタン・プロジェクト」の一翼を担うようになり、アインシュタインの数学助手、コンピュータ言語 Basic の共同開発者、ダートマス大学学長になるケメニー (John George Kemeny 1926–1992) が同級生であった。最後に、世界的なソプラノ歌手マリア・カラス (Maria Callas 1923–1977) もキッシンジャーとほぼ同じ年度に在学している。彼女はギリシア系で、同国系の大富豪オナシス (Aristotle Sokratis Onassis 1906–1975) の愛人にもなった。オナシスはのちケネディ大統領 (John Fitzgerald Kennedy 1917–1963) の暗殺後、その未亡人ジャクリーン (Jacqueline Lee Bouvier Kennedy Onassis 1929–1994) と結婚している。一公立高校の卒業生とその知己という単純なつながりの範囲内でこれほどの世界的有名人がさり気なく絡んでくるのが、いかにもニューヨークらしい¹⁰。

II.2 音楽と経済学

母の一族も親戚のハルパート家も音楽一家だったため、グリーンズパンの音楽との縁は実際とても深い。母はグランドピアノを持っていて歌も歌い、伯父のマーリはマリオ・シルバの名で芸能界入りして作曲家シューマンを題材にしたブロードウェイ・ミュージカル『愛の調べ』(Song of Love) を書いた。アラン自身も 12 歳でクラリネットを始め、ベニー・グッドマン、グレン・ミラーらに憧れて練習に励んだ。真珠湾攻撃の当日も、自分の部屋でクラリネットの練習をしていた。1943 年に 17 歳で高校を出たとき、大学進学はまったく念頭になく、18 歳で召集令状が来るまで腕を磨いておこうとバンドで経験を積み重ね、1943 年から 1944 年まで名門ジュリアード音楽院 (1905 年設立の世界的な音楽の名門で、パリのコンセルヴァトワールと並び称される) でクラリネット、ピアノ、作曲を学んだ。兵役についたら軍楽隊員になろうと考えていたが、X 線写真で呼吸器に黒い影が出て結核が疑われ、異常はなかったものの不採用となった。(AOT 20, 23–26; 上巻 32–33, 37–40)

これでかえって進路が確定し、通っていた音楽教室の教師ビル・シャイナーに、サクスを練習して 15 歳の少年とバンドを組めといわれた。この少年がジャズ史でも最も偉大なミュージシャンの一人とされるスタンリー・ゲッツ (Stanley Getz 1927–1991) であった。何とか競演できたグリーンズパンだが、才能の違いを痛感する。

彼と共演するようになるというシャイナーの依頼は、酒場のピアノ弾きにモーツァルトとアルペジオの速弾きを競えというのと少し似たところがあった。ゲッツとはうま

10 適切なたとえであるかは議論が分かれるだろうが、ある時期の小石川高校と似ているように思う。

く共演できたが、彼が演奏しているときはただ恐れ多くて聞き惚れるしかなかった。すごい才能の持ち主に出会うと、そういうレベルの能力に手が届くと思えて自分なりについていこうとすることもあろう。そうかと思えば、これはどちらかという生まれつきの天才だからいくら努力を積んでも追いつけるものではない、と思わせる相手もいる。スタン・ゲッツの場合は後者のタイプであった。(AOT 26; 上巻 41)

その後グリーンスパンはオーディションを受けてヘンリ・ジェローム楽団に入る。演奏旅行続きの生活に入り、念願のニューヨーク脱出が図れた。だが、ある程度有名な楽団とはいえ 14 人の団員の 1 人にすぎない。その中で彼は、「ベニー・グッドマンやアーティ・ショウなどの偉大な即興に憧れたが、ソロを担おうと思ったことはほとんどなかった。伴奏で満足し、誰かが書いた譜面を演奏した」(AOT 27-28; 上巻 43)。

世界最強の中央銀行で総裁として世界記録をマークした人物の最初の職業が金融業でも実業でもなくミュージシャンだったことを紹介しようとしてこういう話になったが、考えてみればのちの FRB 議長なのだからバンドのリーダーであるべきだったと考えるのも根拠がない。唯一確かなことは、若きグリーンスパンが、中央銀行家としては何とも場違いで、ありえないほど常識外れなスタートを切ったということだけである。直接本人に取材もして伝記を書いたタッシルは、グリーンスパンが内気な一介のバンドマンから「金融政策というデルポイの神託を伝える預言者の道に進み入ったことは、アメリカ合州国でしか起こりえない叙事詩的英雄譚である」(Tuccille 2002, xiv) と述べている。

しかし、グリーンスパンは一生音楽家としてすごそうという展望は持たず、楽団員の納税申告を引き受けるとともに、図書館で金融関係の本を借りてきて読みあさるようになる。そうやって読んだ中に、モルガンに関するものがあつた。このことは多少とも関心をひく。まず、ジャック・モルガン (Jack Pierpont Morgan 1837-1913) は鉄鋼業界や電機業界を支配した世界史上最も目立つ銀行家の一人だが、グリーンスパンはのちに鉄鋼業界の専門家になるとともに、その後は J. P. モルガン社の社外取締役になっている。次に、1907 年恐慌のとき、モルガンの呼びかけでニューヨークの金融機関が最後の貸手機能を代行して中央銀行の役割を果たし、このことがきっかけになって連邦準備が創設されたことはアメリカ金融史上有名であるが、そのときの話し合いが行われた会議室に入ったと述べている (AOT 28, note; 上巻 44, 45 注)。グリーンスパン時代は、ボルカー時代と違って、1987 年の「ブラックマンデー」以降、世界的に金融パニックが多い「波乱の時代」であつたことが大きな特徴であるが、そのたびに最後の貸手として市場に流動性を供給した自らの歩みをモルガンに重ね合わせているらしいのである。こうし

て彼は父も働いていたウォール街を、漠たる憧れとともに遠景にとらえるとともに、次第にかなり具体的に次の職場として考えるようになる。

他方、後年のエコノミストとしてのキャリアを支える数学への関心も、このころにはすでに形をとり始めている。学校へ行く前から片鱗を示した数学的才能は、高校でも成長し続け、ケメニーの刺激もあって関心は深まり、各科目の中でも特に成績が良かった。1945年に入学したニューヨーク大学商学部での学びは、金融と数学を融合させたものであった。いずれも自分が深く関心を寄せる分野だけに、ジュリアード時代は学業から離れていたにもかかわらず、成績が高校時代より上がったほどであった。同大学商学部は1万人の学生を擁する大所帯で、ある学部長が「巨大な教育工場」とやや自虐的な自己像を披露したことがあるという。サミュエルソンの有名な証言にあるとおり、当時のアメリカではケインズの『一般理論』(Keynes 1936)が大きな影響力をもったが、グリーンズパンも同書を学んだ。ただし、深く魅了されたわけではなかった。(AOT 28-29; 上巻44-45)

〔ロバート・〕カベシュなど大半の級友は熱烈なケインジアンだったが、私は違った。『一般理論』は二度読んだ。確かにとても優れた本である。だが、私が魅かれたのは数理面での革新と構造的な分析にであって、経済政策に関する考え方にはではない。まだ伴奏で満足する心理を引きずっていた。つまり、技術的な問題に集中するのが好きで、マクロ経済学的視点は持たなかった。経済政策には興味がなかったのである。(AOT 30; 上巻47)

ある日、統計学教授でのちにニクソン政権の労働省統計局長になるジェフリ・ムーアに呼ばれ、投資銀行ブラウン・ブラザーズ・ハリマンに行ってFRB発表のデパート売上高データから季節調整済みの数値を算出する仕事をもらった。こうして初めてウォール街に足を踏み入れるが、上等の調度品に囲まれたオフィスは、「ワシントン・ハイツで育ったガキにとっては、いわば足が震える感じがする場所だった」(AOT 31; 上巻48)。1948年には卒業し、生活のために働きながら夜間の修士課程への進学を考えた。そして、指導教授の一人がチーフエコノミストを務めていたカンファレンス・ボード(正式名称はNational Industrial Conference Boardで大恐慌時代の失業統計なども提供した名門シンクタンク)という民間研究所に入る。統計資料が充実していたことがグリーンズパンの関心に火をつけ、資料室から自分のデスクに『綿花産業の顧客調査』や、19世紀末の「金ぴか時代」の国勢調査などを運んでは飽きずに眺め続けたという。そして、まもなく研究所の紀要『Business Record』に寄稿するようになる。

このカンファレンス・ボード勤務を続けながら、1950年にコロンビア大学大学院の

博士課程に進学する。指導教授がのち(1970~78年)にFRB議長を務めるアーサー・バーンズ(Arthur Burns 1904-1987)で、当時NBER(National Bureau of Economic Research:全米経済研究所)のシニア研究員も兼任していた。バーンズの学風についてグリーンスパンは、「経験データと演繹論理に関心の軸をおいており、経済学の主流とは一線を画していた」(AOT 35;上巻 54)と述べている。また、ブッシュ時代の国防副長官で、のちに世銀総裁を歴任したポール・ウルフォウィッツの父ジェイコブには統計数学を教わった。これは草創期の計量経済学だが、この分野こそがグリーンスパンの関心を最も強く惹きつけた。「何よりも重要だったのは、25歳にして自分が勝てそうな新興の分野を見つけたことだった」(AOT 36;上巻 54)。計量経済学は、その後のグリーンスパンの仕事の中でもある程度重要な位置を占めることになる。

さて、その後グリーンスパンはコロンビア大学に提出すべき博士論文の執筆を中断してカンファレンス・ボードの仕事に専念していくから、大学での学歴はこれでほぼ全てである。キャリア上の次のステップは、まずは共同代表をつとめるシンクタンクでのコンサルタント業務だが、それに続くのが、フォード政権の大統領経済諮問委員会委員長(CEA)によって前半の、FRB議長によって後半の頂点を迎えるワシントンでの公務である。何とも華やかな転身であるが、きっかけはヘンリ・ジェローム楽団のメンバーであったガーマント(Leonard Garment 1924-)や自分より10歳若いコロンビア大学教授アンダスン(Martin Anderson 1936-)からの紹介でニクソンの選挙戦のスタッフになったことだというから(AOT 57;上巻 82-83)、国の中心都市の心臓部で東奔西走する「マンハッタン・マン」であったことが幸いして、アメリカ政府の要職を担うその後の人生と実に見事に接続していくのである。しかし、数学と経済統計という人間臭さとはおよそ縁遠い諸分野に傾倒し、卒業するまで「経済政策には興味がなかった」青年グリーンスパンに、学校で学んだ数学と統計学の世界をはるかに超え出た広大な世界観を扶植し、そのことによってこれらの知識に方向づけを与えるとともに、結果的にワシントンという舞台での目を見張る活躍の基盤を提供した思想家がいる。次節では、彼女のことについて話そう。

Ⅲ 盲点をつくアイン・ランド——資本主義はまだ成立していない

Ⅲ.1 亡命作家と「哲学小説」

その思想家とは、ユダヤ系ロシア人でアメリカに亡命したアイン・ランド(Ayn Rand 1905-1982)である。本名はアリッサ・ローゼンバウムで、ザンクト・ペテルスブルク(ペトログラード)の大きな薬局を経営する父のもとに生まれた。家は裕福で料理人やメイドもいたが、1917年の大革命後、店は国有化されて暮らし向きが悪化した。こう

した経験からか、彼女はケレンスキ政府が真の革命政権であってレーニンの政府は野蛮だという見方を抱いた。白軍支配下のクリミアに逃れ、高校時代に無神論者になって理性至上主義を奉じ始める。のちレニングラードと改名された故郷に戻り、ペトログラード大学社会教育学部で歴史を専攻しながら哲学も学び、プラトン、アリストテレス、ニーチェを耽読する一方、作家志望者としてユゴー、ドストエフスキー、シラーなどにも親しんだ。1924年の卒業後、翌1925年からレニングラードのテクニクム (Technicum) で映画芸術を学んだ。1926年にシカゴで映画館を経営していた親戚を頼ってアメリカに渡り、脚本家を目指してハリウッドに移住するがうまくいかず、食べるために職を転々とし、1931年にアメリカ市民権を獲得する。1934年ころからいくつかの作品がブロードウェイなどで採用され始め、映画版も製作されるが、夢はあくまで作家であった。自伝的な『われら生ける者』(Rand 1936)が小説デビュー作だが(のち映画化)、出世作となったのが『水源』(Rand 1943)である。同作は、建築家ハワード・ロークが自ら設計した公営住宅が勝手に設計変更されたので完成後に爆破するものの裁判で無罪になるというストーリーで、700ページ近い大冊である。通奏低音をなすのは、創造的な仕事をオリジナリティのない「借用人間」(second-handed men)が阻むことを、黙認できない罪として告発するという独自の思想である。

1957年に刊行された代表作『肩をすくめるアトラス』(Rand 1996)も小説である。合理的な利己性こそ道徳的で利他性は悪徳であるという新たな道徳哲学の構想を全面展開した1000ページを超える畢生の大作だが、そのメッセージ性ゆえに「聖書の次にアメリカ人に影響を与えた本」と言われるほどの影響力をもつ問題作でもある¹¹。プロットを簡単に紹介しておこう。鉄道会社の女社長ダグニーは、人材の流出や政府の反市場的政策に悩む。そんな中、行き詰まりを感じるたびに人々が「ジョン・ゴルトって誰だよ?」として不安を表明する不可解な習慣が蔓延し始めた。社長は新エネルギーを応用した画期的なモーターが破壊された跡を発見し、設計者を調べるとゴルトであると判明する。彼は個人の能力が評価されない自分の会社に絶望して辞職し、理想的な資本主義社会をつくるためにダグニーの会社の一社員として働きながら優秀な人材を自分の共同体に引き抜いていたのである。人材流出で経済が回らなくなり、社会が混乱する中、ゴルトは全米向けのラジオ放送でこうなった理由を説明する。

容易にわかるとおり、この筋書は、資本主義における「搾取」の横暴から逃れてしば

11 議会図書館、および会員制書籍販売機構「毎月の本クラブ」(Book-of-the-Month Club)が会員5000人に人生で最も影響を受けた本をたずねると、『アトラス』が2位で、1位は聖書だった。アメリカでは大学生ころの知的自立を模索する時期の青年男女に『アトラス』が広範に読まれており、議員の中にも愛読者が多い。

12 藤森2001が同書邦訳以前の本格的な紹介である。同氏による「日本アイン・ランド研究会」のウェブサイトには主要作品の筋書きが要約されている (<http://www.aynrand2001japan.com/index1.html>)。

しば田園で理想の共同体を構築する社会主義運動のパロディでもあり、社会主義における悪平等の横暴から逃れて山中で理想的な資本主義共同体を創設するというものである。われわれ人類は、社会主義の実験がつねに失敗し、そのたびに資本主義にきわめて不格好で決まりの悪い形で回収される光景をもう1世紀以上も目にしてきた。現代経済は、基本的に両方の要素が混じって運営されているが、同作は資本主義を山中に隠遁させるという意外性のあるプロットによって混沌たる現代経済を遠心分離器にかけ、実は資本主義こそ成功と繁栄の真因であることを浮き彫りにしてみせたのである。

しかし、この作品が読者に強い衝撃を与える理由は、おそらく筋書自体にあるのではない。むしろ、現代社会が不可避免的に構成員の人間性を抑圧する構造になっていることを、特定の政治体制、社会制度、イデオロギーの批判からではなく、むしろこの構造の底に潜む道徳原理面でのある根源的な要因から哲学的に解き明かした点にある。それが凝縮されたのがゴールトのラジオ演説であり、おそらく『カラマゾフの兄弟』における「大審問官」に相当する。ランドはあくまで作家を自認したが、その作品はドストエフスキー張りの長大な独白と、その独白の内容の強固なメッセージ性において、明らかに思想書として受容されてきた経緯があり、小説の古典的典範の枠をはみ出すような過剰さ、いびつさをもつ（実際ランドはロマン主義を支持する）。このため、小説として低い評価を受けることもあるが、このいびつさはむしろランド作品の身上であって、それを理由に内容の十分な検討を省いてしまえば批評にも紹介にもならない。アメリカ文学史にも哲学的な小説は少なくないが、哲学小説の大国であるロシアからの亡命作家が伝統をさらに強めたのである。彼女の本は毎年数万部売れるなどセールス面でも成功しているが、作品群の中核をなす同作が、明らかに聖書とはまるで異質な思想を盛るのに聖書の次に影響力をもつといわれるほど広く読まれてきた理由を説明しなければならないだろう。

しかし、こう述べるときの「哲学」とは何であろうか。ランドは、その哲学を試論¹³の形でも説いているが、創作中の長広舌も迫力に満ちた異例のスタイルでの哲学叙述になっており、さらに試論の中でさかんに創作の作中人物の台詞を引用するという独自の手法も用いた。つまり、通常の哲学者が書く体系書の形ではなく、小説やそれを補助す

13 通常「評論」と表現するところだろうが、英語との対応を考えると、それは「review」（出来事の「見直し」「復習」を意味する）である。だが、ランドのノンフィクションはむしろ「essay」というべきなので、直訳して「試論」とする。ただし、日本語による散文表現の歴史の中に英語圏の「essay」に相当するものは存在しないので、おそらく本来訳出できない。それは、『枕草子』や『徒然草』のような「随筆」が子供だましに見えるほど論文的で、「論説文」が最も近いだろうが、新聞や雑誌の記事とはちがって、ある分野における新基軸を打ち出すような組織立った論考を指す。「エッセイ」と表記するとゴーストライターによるマスコミ有名人の本と同類になってしまう。何とも不自由である。ロックの『人間知性論』のような哲学書、ヒュームの『政治論集』のような社会科学の論考、さらにケインズ『説得論集』のような時論、バーナッキの名著『大恐慌論』のような学術書も、すべて原題は「essay」であるという事実を指摘しておく。

る試論の形で哲学が散りばめられているのである。¹⁴ 本稿はランド研究ではないので、本来グリーンスパンの資本主義観、経済政策論への彼女の影響を理解するために必要な点を紹介すれば事足りるのだが、ランドの資本主義論はその哲学と切り離せないで、以下ではまず『アトラス』ほかに盛られた彼女の形而上学を定式化し、これを土台に倫理学を理解するという迂回路をわざわざたどってその資本主義論を跡づけていこう。

Ⅲ.2 ランド哲学の構造とその問題性

最初に、便宜的なものになるが、ランドの哲学を要約しておこう。

- 1) 人間の生存のために最も重要な能力は理性で、その役割は、自己や事物の自同性 (identity) を見出し、これによって自己を生存させ、さらに幸福にすることである。
- 2) 人生に目的をもってそれを追求すべきであり、そうする人の理性的行為に見られる利己性は道德にかなう。それどころか、これこそが「道德」の正しい定義であり、既存の道德理解は誤りである。
- 3) 他人も上記のように生きることを理解して尊重すべきだが、他人の犠牲になることも他人を犠牲にすることも、犠牲にされた側の存在の自同性を否定するから非道德的である。

このように述べると、ある種の挑発的なメッセージを感じ取る人も多いただろう。しかし、これでもかなり控えめな表現であることは、以下の詳論を読むにつれて自ずと明らかになるだろう。また、ランド思想のうち、最も抽象度の高い形而上学部門 (存在論など) の特徴は、一言でいうと、理性の役割の重視とその基盤にある行為的・能動的で建設的な理性観にある。

ただ、彼女の哲学は、以上ではすませられないいくつかのきわめて重大な問題を孕む。一言でいうなら、2000年を超える西洋哲学史の基本的な流れをせき止めて別の方

14 『アトラス』は小説ながら哲学用語も多用される。ただ、ある程度平易な表現をとろうと努力してはいる。創作中の独白部分と試論の行論の間には意外と差がないが、後者では具体的に哲学者の名をあげて学説を批判しており (Rand 1961)、試論で小説を解説するという意図も読み取れる。一般向けのプラットフォームも持つということは、彼女の思想の内容そのものから必然的に出てくるともいえる。この意味で、「これまでに哲学がもった最も偉大なセールスマン」(Peikoff 1982, vii) とか「ポップ哲学者」(Rand 1964; 邦訳 272) といった評価 (藤森かよこ) は妥当であろう。また、ランドは試論執筆をあくまで創作に付随する活動と見なしたが、それなのに同作を最後に小説の筆を折って自らの思想の普及に専念したことから、ランド哲学の集大成として無視できない重要作である。『アトラス』のこうした特徴から、本稿では、小説であるにもかかわらず、その中の記述をランドの思想の表明として取り扱う。試論に見出せるアイデアとの対応関係、アイデアを補強するための試論中での同作中人物の台詞の再引用などの事実から見て、創作を思想表明の場としたと判断してよいと思われるからである。

向に向けようとしたうえに、200年を超える歴史をもつ経済学の前提を大きく揺さぶる所説を展開したのである。これを再び3点にわたってまとめよう。

- (A) 理性の能力に対する制約や懐疑の歴史であった近代哲学史を理性復権によって相対化し、その一部ではなく全体を覆そうとした。
- (B) この哲学に基づいて合理的である限りの個人の利己性を称揚して利他主義を反道徳的として退け、宗教が影響力をもった昔ばかりでなく今も生きている見解を正面から否定した。
- (C) こうした利己主義の立場を社会哲学に展開する中で、個人の自由を保証する唯一の社会原理として徹底したレッセフェール資本主義を支持して既存の社会の構成原理を批判に晒し、さらに何と自分が考えるような資本主義はまだ成立していない、と説いた。

以上、前もって彼女の哲学の内容、特徴、およびそれが孕みもつ問題を定式化しておいた。実は、これら三つの問題は、形而上学、倫理学、社会理論からなるランド思想の体系に対応している。これを仮に「ランド思想の三層体系」と呼んでおこう。次に、この三層に対応させた上記の三つの問題を詳論し、その含意を考察することをとおして、ランドの思想を見ていこう。

Ⅲ.3 第一層——存在の形而上学

まず、(A)の理性の復権についてである。ランドは、主として認識論や倫理学においてとる立場から自らの哲学を「客観主義」(objectivism)と呼んだ。これは、「オッカムの刃」^{やいば}をもじった「ランドの刃」と呼ばれる叙述の経済性(や冗長さ回避)の原則で三つに絞り込まれた公理系から説明される(Rand 1996, 929-930; 邦訳 1094-95)。第1に「存在の公理」で、「存在するものは存在する」と要約される。これは、二つの付随的命題、「知覚されたものは存在する」、「人は意識(存在することを知覚する能力)をもって存在する」を生じる。第2に「意識の公理」で、「意識は必ず何らかの対象に関する意識である」と要約できる。これは第1の存在の公理と関係しており、何も存在しなければ意識もなく、また意識する対象が存在しないなどと述べる人は意識を持たない。第3は「自同性帰着の公理」で、「 $A=A$ 」と要約される。実は最も重要な公理はこれである。¹⁵

15 『アトラス』は「無矛盾性」(Non-Contradiction)、「選択」(Either-Or)、「AはAである」の3部構成だが、おそらくそれぞれ論理学の(無)矛盾律、排中律、自同律に対応していると思われ、この視点で作品の企図を解釈できる。第3部末のゴールトのラジオ演説で、人間は本性上みな利己性を追求せざるを得ない(自同性)のに、過てる利他道徳の蔓延で(誤選択)このことがずっとほかされ続けて(矛)

この3大公理に基づいて、人間の生における理性の役割の重要性、個の確立と利己主義の道徳性が強調される。人は、お腹が減ったので何かを食べたいといったごく日常的な欲求を満たすためにさえ理性の力を借りねばならないが、食べ物を欲するというのも「種」としてではなく「個」としての自己保存のための基本的な欲求である。これは、創造的な仕事をしたいといったより高次の自己実現の欲求と連続性のもとでとらえられ、ともに人間の自同性（人間の人間性）から導かれる「道徳的」な欲求とされる。3大公理すべてを絡めて表現すると、「自同性」の「意識」をもつ「存在」、つまり自己（self）が生存のために自らの利益（self-interest）を追求することが人間の本質であり道徳でもある。これが利己性（self-interest）の哲学である。彼女はこの哲学を「地上に生きるための哲学」と呼ぶが、それは「公式」な名称の「客観主義」と並行して用いられる「非公式」な名称、つまり一般向けのプラットフォームに立てられた看板である（Rand 1982, 13¹⁶）。哲学では、伝統的に諸器官が対象の印象を受容して人間の諸能力がそれを加工すると考え、理性はふつうこのプロセスの後半に登場するが、ランド哲学の認識論上の特徴は、その理性の役割を強調する点にある。

人間は知識を得ずに生きていけず、そのための唯一の手段は理性である。理性は感覚が与えるものを知覚し、自同性帰着させ（identify）、統合する能力である。……人間は色のついた塊を知覚する。視角と触覚の根拠を統合してそれを固体と認識する。こうして、その対象を机と認識する。……この過程全てにおいて、精神の仕事はそれが何であるかという一つの疑問に答えることにある。答えの真実性を確認する手段が論理で、論理は存在が存在するという公理に依拠する。論理とは、無矛盾な自同性帰着（non-contradictory identification）のわざである。矛盾は存在できな

16) 盾)、社会が機能不全に陥ったので、故郷に帰還させること（identification）によって人間の本体を闡明したかった（自同性への回帰）ものと読める。「A=A」を強調した哲学者としてはエレア学派やパルメニデスが知られている。演説の中に「何世紀も前に……人類の中で最も偉大な哲学者は、存在の概念とあらゆる知識の規則を定義する公式を述べた。〈A は A である〉。事物はそれ自体である。このことの意味は誰にも理解されていない。いまここでその意味を成就させよう。存在とは自同性であり、意識とは自同性帰着（identification）である」（*ibid.*, 929-930; 邦訳 1095）という件りがあるが、「人類の中で最も偉大な哲学者」とはアリストテレスであろう。哲学史においては、ヘラクレイトスの万物流転の哲学が示す無からの有の生成論を否定したのがパルメニデスの「あるものはあり、ないものはない」（有は存在し、無は存在しない）というテーゼで、プラトンは二者を調停しようとしてイデア説を構想したが、やはりアポリアが残った。アリストテレスは『形而上学』でイデア説批判を展開し、無からの有の生成という所説が矛盾に陥ることをパルメニデスを参照しながら説明している（Aristotle 1933, XIV.2; 下巻 228 以下）。ランドは、そのヘラクレイトスの世界観を金額の書かれていない小切手を手渡すことに喩えてははっきり否定している（Rand 1964, 38-39; 邦訳 75）。

16) これは、1975年のウェストポイント（陸軍士官学校）での講演で述べられている。彼女は講演を不時着した宇宙船の乗組員のストーリーで始め、非日常的な舞台設定に思えるかもしれないが、ほとんどの人間が地球上に不時着したようなもので、見慣れぬ環境で生き残るためには理性を用いる必要があるのに、それが十分できておらず、そのための指針を与える知こそ哲学に他ならない、との巧みな喩えのもとでこの定式を導き出している。

い。原子はそれ自体である。宇宙も然り。いずれもその自同性と矛盾しえず、部分が全体と矛盾することもない。……矛盾したことを主張するのは、人間の頭脳を放棄して実在の国から自らを立ち退かせることだ。実在とは存在するもののことである。非実在は存在しない。非実在とは存在否定にすぎず、人間の意識が理性を放棄しようとするときの意識の中身の謂いである。真理とは実在の認識である。理性、それは人知の唯一の手段で、真理の唯一の基準である。(Rand 1996, 930; 邦訳 1095-96)

このように、理性の権能と能力が大きく評価されているが、そこにはある無視できない大きな問題が潜む。というのも、哲学史は、古代における実体 (ousia; ^{ウーシア} substance) の認識可能性という前提が徐々に掘り崩され、時代が下るにつれて事物が「何であるか」からそれが「どう見えるか」に関心を移していく過程と理解できるが、ランドはアリストテレスに依拠して、事物が客観的に理解できる、と主張するからである。こうした近代哲学の認識論的基盤の組替えにより、ランドの哲学は近代哲学の一部ではなく、実に全体に対する批判となるのである。

彼女が自らの哲学の特徴づけに用いる「客観主義」という語の意味も、ここから明らかであろう。それは、近代哲学を統合した上で「物自体」は認識できないとしたカント哲学に対する正面きっての批判であり、古代哲学における実体の把握可能性を覆したカントの「コペルニクス的転回」をそっくり巻き戻そうとするものである。まことに驚きに値する議論である。事物の自同性確認が、実在の客観的把握なのである。総じて、近代哲学史は理性の能力に対する自信喪失の歴史でもあった。現代では、人間を理性に導かれる建設的存在としてではなく、誤謬と狂気に翻弄される破壊的存在として描くことに、何ら目新しさはない。それとともに哲学叙述の文体は難解の度を増し、素人をほとんど寄せつけないものになっている。けれども、『アトラス』における客観主義哲学のシンボリック人物ゴールトによると、自同性の公理を認めようとしないうちは、

君たちをどの歴史時代より暗黒の時代に連れ戻そうとしている。目指すは科学以前の時代ではなく言語以前の時代である。その目的は、人間の知性と生と文化の基礎となる概念、つまり客観的実在の概念を君たちから奪うことである。(ibid., 952; 邦訳 1122)

驚くべき点はもう一つある。ランドは当初、自分の哲学を「existentialism」と呼ぼうとしていたが、すでに使われているので「客観主義」に変更したという (Peikoff 1993, 36)。むろん、この先客は「実存主義」である。ボルシェヴィキではなくナチスから逃

れてアメリカにたどりついた政治思想家ハンナ・アレントは、『アトラス』刊行の翌1958年に発表された『人間の条件』で、やはり古代ギリシアを参照点として、古代のポリスでは「活動的生活」により共同体内で明確な役割を果たす機会があるため、各市民は自分の能力を発揮して充実した生を送りえたが、現代ではこうした機会が消失したために人間は実存主義などの生の哲学に追いやられていると主張したが、その際彼女は近代哲学が全体に「主観主義」(subjectivism)の方を向いていると指摘しているから(Arendt 1958, 272; 邦訳 434-435)、ランドの名称変更は、哲学史の大まかな流れについて彼女がアレントとさほど違わない現状認識をもっていたことを示唆するものではある。そして、当初の名称では、「existence」を揺らぎ続ける「実存」ではなく上に述べたように「実体」に近い意味に解して、「存在主義」を構想していたことになる。ここにも、既存パラダイムに対する大胆な反論、いわば「コペルニクスの再転回」とでもいうべき革新的な着想が垣間見えるのである。

Ⅲ.4 第二層——形而上学から倫理学へ

こうした独自の形而上学を基盤に、やはり独自の政治論や経済論が成立する。ただし、認識論と社会理論の間には、倫理学というステップがあり、それを媒介して社会理論が組み立てられる。ランドの倫理学は、一言でいえば利己主義の倫理学であり、先述の諸問題の中では(B)に関わる。

倫理学にもランドの刃は適用され、客観主義にとって最も重要な価値が再び三つに絞られている。それは、理性、目的、自己肯定(self-esteem)であり、それぞれの価値に合理性、生産性、誇りの三つの美德が伴う(Rand 1964, 27; 邦訳 53)。¹⁷「理性」が筆頭に来るのは、上述の認識論によると人間が生存のために必要な価値を判断できる唯一の手段がそれだからである。このため、合理性が人間本性に根ざした最も基本的な美德である。そして、理性は生ける存在としての人間の生存(自己保存)のために働くべきである。このことを実行できれば、自分なりの幸福、生の道徳的「目的」が達成できるので、当然「自己肯定」がついてくる。この意味で、生物学的な人間観から利己主義が正当化されているのである。逆に、利己性という人間の本性を否定すると、必然的に自己破壊に至りつく。

もし自分の生存手段を悪と見る生物なんてものがあれば、生き残れないだろう。自分の根を切り刻もうと必死になる植物、自分の翼を折ろうともがく鳥なんてものがいたら、自ら存在を侮辱したので長く存在し続けることができないだろう。ところ

17 『アトラス』では、美德にはさらに独立性、誠意(一貫性)、廉直、正義が加えられて、都合7つになる(Rand 1996, 932-934; 邦訳 1098-1100)。

が、人間の歴史は実際に精神を否定し破壊しようとする闘争劇だった。……人間の本性から生じる選択肢がある。合理的存在でいるか自滅的な動物になるかである。人間は、人間にならねばならない——選択することによって。(Rand 1996, 927; 邦訳 1092)

先にランド哲学を要約して、理性的行為に見られる利己性が道徳的であると述べたが、これは利己性の中に思いのほか道徳性があるとしてその部分的な見直しを示唆するのみの控え目な譲歩請求ではなく、利己的なものは道徳的で道徳的なものは利己的であると断じ、利他主義を排することによって常識に挑みかかり、その基本的書換えを求め大胆な駁論提示である。ただ、こう述べるとランドは剥き出しの我欲とそこから発するはた迷惑な行動を積極的に肯定したのかという疑問を抱く向きもあるかもしれない。しかし、その心配はない。ランドはその利己主義論において、まず人間の非日常的な行為原則ではなくその日常的な行為原則としては利己主義こそがふさわしいと主張し、次に原則としての利己性と矛盾しない限りは一定の利他性を認め、かつこうした利他的行為ですら利己的であると主張する。

例えば、誰かが川で溺れている人を見つけたとする。利他主義の立場からは、流れに身を投げ出してその人を助けるべきであることになるだろう。もし実践すれば、この行為は賞賛に値するものではある。しかし、こうした緊急事態での行為を日常生活を送る場である社会を構成する原則として語るのは、問題のすり替えである。その理由を、想定する状況の段階別に三つに分けて述べよう。まず、そんな状況は実はあまりない。それどころか、おそらく大半の人が一生遭遇しない。次に、仮に遭遇しても、水温や自分の水泳力等の客観的条件に照らして溺れている人を助けるのが無理なら助ける必要はなく、助ける能力があっても自分にとって相手もつ重要性に照らして実際に川に飛び込むかどうかを判断すればよい。最愛の人が溺れていて自分の能力で助けられるのに助けなかった者は利己主義者ではない。この場合、助けた者こそが利己的である。大切な人を失うことで陥る困惑から自分を救ったともいえるからである。最後に、見ず知らずの人を助けた場合、そのあと相手が貧困に苦しんでいるとわかったとしても、金銭を与えるべきではない (Rand 1964, 52–53; 邦訳 84–85)。この最後の部分は、緊急事態の例外的行為原則と平時の原則的行為原則の区別を自覚するよう促すものである。蛇足かもしれないが、この場合に助けてもらった上に金銭を得られるとすれば、わざわざ川に溺れに行く者が続出する可能性もあり、それでは社会が混乱に陥ることは誰でも想像がつく。

ランドが強調するのは、こうした緊急事態でのいわば救済のトリアージの基準になるのは、救済される側にする側が認める価値の主観的優先順位だという点である。人は日

ごろからこうした優先順位の上下構造^{ハイアラキー}を心中に抱きながら生きるべきであるし、またこの順位を定める際の基準は自己保存という最低限の価値と自己実現という最終的な価値を達成するための利己性である。重要なことには、この場合の価値の序列化を担うのは理性である。こうして、形而上学における理性重視の基本指針は倫理学にも持ち込まれ、理性という主軸が両者を貫いている。理性はいま一度首座に据えられるのである (*ibid.*, 50; 邦訳 81-82)。理性が導く利己的行為こそが道德であるとするこのようなランド倫理学は、「道德」という語を悪徳の不在として消極的にとらえるのではなく、自分にとっての価値を実現する実行力、能動的な働きかけとして積極的にとらえており、ふつうの用法とは異なる¹⁸。それは、消極的な道德に対置された意味での「执行的な徳」を論究したものである。こうした議論の示し方には、マキャヴェッリを思わせるものがある。理性は *virtú* (执行的な徳) を導く覚めた参謀なのである。

19世紀にドイツ人の篤学心のもとで、哲学は認識論の壮大な体系を備えるようになったが、それはアレントが指摘したような哲学の主観化の過程によく対応する。これに対して、中世を貫いて近代初期に至るまでは社会哲学の地位が相対的に高かった。これが「道德哲学」(moral philosophy) と総称されることは、それ自身にとって結果的に不幸かもしれない。というのも、この名称は、あたかもそれが抹香くさいお説教の体系のように響くからだ。しかし、「moral」という語は本来「習慣」を意味し、それを扱う道德哲学は、社会構成の理論(よりよい社会のしくみを考える理論)でもあった。また、キリスト教を知らないアリストテレスは、倫理学において「卓越」(「徳」とも訳せる)を「知性的卓越」と「倫理的卓越」に区分し、前者が教導に負う部分が大きいのに対して後者は習慣^{エトス}づけで生じるとしている (Aristotle 1934, II.1 [Book II, Chapter 1]; 上巻 55)。ちなみに、ギリシア語で「倫理」は「エトス」である。アリストテレスはさらに、自己完成(perfection)を習慣論に関連づけている。すなわち、倫理的卓越は、石を数万回上に投げてもそのまま上昇する本性が生まれれないと同様に本性に備わるものではないので「習慣づけによってはじめて、このようなわれわれが完成されるにいたるのである」(*ibid.*; 上巻 56)。

話がそれたようにも見えるかもしれないが、ランドの企図が、19世紀に対象である社会そのものの変貌につれて自ら勢力を弱めた道德哲学の手法を現代に甦らせるという一面をもっていることを強調するためである。ランドにおいても、このような徳論¹⁹に自

18 例えば、モーゼの「十戒」は七つまでが否定文であるため、三つしか能動的行為(action)に関わらない。こうした事実は、古代ユダヤ人の民度を反映したものであろうが、その後七つの禁止事項の反復が不要になったという話は聞かず、むしろこちらのほうこそ人々がふつう「道德」という語で思い浮かべるものとなっている。つまり、既存道德は、何をしてはいけないかを豊かに物語る一方で、何をすればよいかはほとんど教えてくれない。しかし、そうであることによって、道德は自らを、一応尊重されはするが繰り返すと疎んぜられるという、いわばおせっかい焼きの地位に追いやってきた。

19 この問題は、本稿が主題的に扱うべき事柄の範囲を超えている。ここでは、理論構成の方法的特質について

己完成論が伴っている。『アトラス』においてそれは、先述の美德論に関わって述べられており、具体的には美德の「とり」を務める「誇り」に関連づけられている。

誇りとは、次のような諸事実を認識することである。……生きるためには自分の価値観が必要だが、人間には自動的な価値、自己肯定の自動的な感覚などないので、自分の道徳的理想像と、生まれた以上創造しようと思えばできるにせよ選び取ることなしには創造できないような人間像とを心に抱いて魂を陶冶することで自己肯定を手にしなければならないという事実を。自己肯定の第一条件は、あらゆるものから物的、精神的価値において最良のものを欲し、何よりも自分自身の道徳的完成を達成することを乞い求めて自分以外の何にも自分より高い価値を認めぬ魂、そんな魂の燦然と輝く利己性であるという事実を。(Rand 1996, 934; 邦訳 1100)

道徳哲学史において自己完成論は伝統的な主題の一つだが、ランドの場合、実は資本主義論と接続している（だから取り上げている）。このようなスタイルの自己完成論はかなり特異なので、次にその接続経路を見ていこう。

ランドがわれわれの社会の経済秩序として想定するのは、上のような意味で自己完成された（またはそれを目指す）個人どうしがこの自己実現の過程で生み出した財やサービスなどの成果を交換しあう社会である。こうした視点から、交換の担い手は「取引者」と呼ばれる。取引者は、自己の意志のみに基づいて成果を交換し、いかなる行為も強制されることはない。強制には暴力が伴うが、暴力は他人に強制しようとする者を排除するときのみ用いられてよい。それ以外の場面で使われると、すべての人間的価値を窒息させてしまう。「銃が用いられ始めるとき、道徳は終焉を迎える」(ibid., 936; 邦訳 1103)。こうした議論が、最小政府論の形で政治論や経済論につながっていくことは、むしろ理解しやすいであろう。ただ、取引者論と取引社会論の間には、公正取引論（交換の正義論）とでもいべき議論が介在しており、ランドが経済思想面で与える影響を考える上では、これが重要な意義をもつ。

ゴールトの考えでは、「取引者とは、自ら得たものを手にし、不当なものを得もしなければ与えもしない人である。彼は、欠如に対して代価を求めず、欠陥ゆえに愛してくれるよう求めることもない」(ibid., 935; 邦訳 1102)。すなわち、交換において各取引者は、自らの生み出した以上の価値を望んではならないが、同時にそれ以下しか受け取らないことがあってはならない。こう考える理由は、自分がしたいことをして生み出された成果が過不足なく評価されることこそ「幸福」の条件だからである。

ㄨ て確認するにとどめる。詳細は、Schneewind 1998などを参照のこと。

幸福とは、無矛盾である喜び——罰も罪もない喜び……精神から逃げずにその力を活かしきる喜び、……飲んだくれではなく生産者の喜びの状態を指す。幸福は合理的な人間、すなわち合理的な目標だけを望み、合理的な価値だけを追求し、合理的な行為だけに喜びを見出す人間のみ可能である。(ibid., 935; 邦訳 1101)

こうして、幸福は合理性(がもたらす公正)に依存する。その理由をさらに問えば、誰もが利己的であるもとでは、自分が利己性を追求する権利と他人がそうする権利は実は同等だから、ということになる。

私は、自分と相手の本性の求めに応じて他人と接する。つまり、理性によって他人と接する。相手が自発的選択によってあえて結びたがる関係以外には何も求めない。取引することができるのは、他人が私の利害と彼らの利己性が一致すると見なしたときのみであり、そのとき私は他人の精神と私の利己性のためだけに取引を行う。他人がそう見なさなければ、関係は結ばない。異議を唱える者は放っておき、かつ私はというと、わが道をそれることはない。(ibid., 936; 邦訳 1102)

ランド哲学の特徴を示す語として「客観主義」が第2候補であったことは上述したが、本命を選ばなかったとしても、それによって怪我の功名として意を得た別の意味もてるようになったともいえる。「objective」という形容詞には、「客観的な」以外に「目的となる」という意味がある。合理的な目的を理想とし、それを合理的に達成しようとする個人の像を、私だけでなく他人にもあてはめてみる時に見えてくるのは、そのような人間どうしがつくる社会である。言い換えると、利己主義者のつくる社会であるが、この社会には目立った特徴がある。それは、他人を目的とする(手段としない)ということである。こう述べれば、それではカント倫理学の再述にすぎないと見る向きもあろう。しかし、ランドにおいては、交換の正義論に基づく社会理論に媒介されることでこうした考え方が資本主義論に結びついている点を見逃してはならない。個々人の理性的な理想の実現を支持し、その過程での他人や国家からの暴力による干渉の排除を求め、やはり利己的であってよい他人を交換相手として目的とする人たちの社会を想定すると、その社会を動かす原理としての「objectivism」は「目的主義」に、また互いが互いの目的であるという意味では「対等主義」ともなるのである。

ランドにおける他人の尊重は、自己の卑下や犠牲をいささかも含まない。また、他人にもそれらを芥子粒ほども求めず、そんなことをする人間との取引は明確に拒否しさえする。利己主義者はしばしば孤立して一匹狼になり、虚空に一見獐猛に遠吠えしながらも自力では不可能な活動からしか得られない成果物を入手しなければ生きていけないこ

とに気づかされる場面ではただの凡人になってしまう。おそらく、そこに共同体主義的^{コミュニタリアン}な見解が入り込む余地があるのだろう。しかし、ランドにおいては、利己性の追求がもたらす孤立のまさしく極みにおいて、公正な取引を介した他人との邂逅が導き入れられるため、孤立からも、不正な富を濫用したサド-マゾ的な支配-従属関係からも無縁でいられる。この意味で、対等主義は巧みにも社会の構成理論たりえるのである。そのうえ、緊張に満ちた拮抗関係を伴うこの孤立と共同の切り結びの構図は、現代社会の現状に適合的であるようにも思える。単純な共同や連帯で簡単に解決するほど問題が与しやすいものであったなら、社会理論家の仕事はもっと気楽なものですんだだろう。実際に全文を読み上げればおそらく数時間に及ぶと思われる長大なゴールトのラジオ演説²⁰の締めくくりの台詞は、次のようなものであった。

誇りという美德のために闘え。人間の本質たる主権ある合理的精神のために闘え。自分の道徳が生^レの道徳であり、自分の闘いが地上にかつて存在したあらゆる達成、あらゆる価値、あらゆる莊嚴、あらゆる善、あらゆる喜びのための闘いであると知る、輝ける確信と完全なる公正さをもって闘え。私が自分の闘いを始めたときに誓った言葉を発する覚悟ができたとき、諸君は勝利する。私の復活の日を知りたいと思う者たちのために、いま世界に向けて声を大にして繰り返す。自分の生とそれに対する愛によって誓う。私は決して他人のために生きることはない。そして、他人に私のために生きるように求めることもない。(ibid., 979; 邦訳 1153)

孤立への熱烈な希求をもつ取引者は、同時に共同や連帯への志向を排除しない。近づきすぎもしなければ遠ざかりすぎもせず、適切な距離感を保って他人と共存し合える社会像が、張り詰めた空気の中で提示されているのである。

Ⅲ.5 第三層——形而上学・倫理学から社会理論へ

以上に見てきたような公正取引論から、上述のランド思想の孕む問題 (C) にアプローチする道筋が見えてくる。実はすでに倫理性の条件としての公正を「取引」概念と関わらせて述べてきたので、議論の中にランド思想の三層体系の第三層が入り込んでいるのだが、その第三層をさらに詳しく取り上げよう。結論から述べると、ランドはレッセフェール資本主義を支持し、そのみが文明の名に値する社会システムであると考えた。ただ、彼女の用語体系における「資本主義」は、「道徳」がそうであったように通常の用法とはかなり異なるものであるから、特に説明を要する。

しかし、その前にランドの方法上の特徴について一言しておくのが便宜に適うだろ

20 インターネットの動画サイトで実際に読み上げた例では、3時間を超える。

う。ここまでの概観からすでに明らかであろうが、ランドの思想は、哲学的人間学から人間の判断や行為に関する理論として倫理学が導かれ、それが社会理論に接続するという構成をとる。こうした手法は、現代の主流派経済学の理論構成においては等閑視されているものでもある。ただ、まったくオリジナルなものだというわけではない。ヨーロッパでは啓蒙期に発達した「道徳哲学」の理論家たちがしばしば踏襲した手法である。ランド理論のこのような方法上の特質を一言でいうと、「ビルドアップ型のミクロ先行マクロ敷衍理論」ということになるだろう。

いま一度、ランド哲学の体系という問題に立ち返って、このことの意味を考察しよう。先に、Ⅲ.2の冒頭でランドの哲学を要約する際に、それが「便宜的」なものだと述べたが、その理由は、ランドが哲学は四つないし五つの分野からなるとしているのに、三つの構成で説明したからである。ランドは、哲学を主題とした先述のウェストポイント講演で、哲学が形而上学、認識論、倫理学、政治学、美学の五つの分野からなると述べているが (Rand 1982, 3-5), 『資本主義——いまだ知られざる理想』では、四つの構成で議論を進めている (本稿では美学論は対象外とする)。

哲学の四つの分野に対応して、資本主義の四つの礎石がある。すなわち、形而上学には人間の本性と生存が求めるものが、認識論には理性が、倫理学には個人の権利が、政治学には自由が対応しているのである。(Rand 1986 [1967], 11)

いくつか説明を補足しておこう。まず、ここでいう「形而上学」とは存在論だが、本稿ではこれを便宜的に認識論と併せてとらえてきた。それは、存在そのものが生得的にもつ能力を想定するよりも理性を重視するのがランドの特徴で、このため理性は後天的に新たな諸機能を開発しなければならないので認識論に対応させられているが、それでも理性という能力とその基本的機能はあらかじめ存在に与えられているらしいからである。次に、政治学を哲学の一分野とすることは一般的とはいえないが、さらに特殊なのは、それを含む四分野すべてが「資本主義の礎石」であるとして資本主義と関連づけられている点である。これはつまり、形而上学から社会理論までの三層体系をランドが一体不可分のものとしてとらえていることを示す。「哲学」という語をこれくらい広い対象に適用することも異例なら、そこに含まれる対象の相互関係も独自である。ただ、この引用文にみられる四分法においては、後二者とその相互関係が重要になるだろう。倫理学に対応した「個人の権利」の核をなすのが所有権 (私有財産権) であるもとの政治学に自由を対応させ、これらを理性重視の形而上学とともに「資本主義の礎石」とする背景には、これらがすべてそろっていなければ資本主義が成り立たず、資本主義が成り立たなければ自由と個人の権利が侵害され、さらにおそらくは理性が崩壊して人間の本

性や生存も危機に瀕するという見方がある。

こう説明すると抽象的だが、ランドはこの問題をソビエト連邦の社会主義実験を例に挙げて考察している。自分の故国で展開したその実験をランドが批判する背景には、「共通善」を「個人の権利」の総和としてではなく、むしろその反対概念、その実現を阻む社会悪としてとらえる視点がある。ソ連において、「共通善」という耳あたりのよい言葉は、その実一部の人間の間でだけ共通な善にすぎず、結果的に個人の善を抑圧する口実としてうまく利用されていたというのである。

この問題を考える上で避けて通れないのは、「善」をどう定義するかという問題である。ランドによると、善の本質については、生得説、主観説、客観説の三つの見方がある。生得説は、状況や善を追求した結果に無関係に特定の事物や行為そのものに善が備わるという立場である。主観説は、現実との接点をもたずに、感覚、欲求、「直観」、気まぐれから善を定める立場である。生得説はある種の現実善を読み取って意識とは無関係と考え、主観説はある種の意識に善を読み取って現実と無関係としていることになる。これら二つは融合しやすい。一方的な基準で善と判断したものを、その来歴の主観性を忘れて生得的な善として押しつけることになる。その結果、力技で善を達成しようとする。だが、そこには本質的な矛盾がある。善とは、あるものに価値があると読み取ること、またはその価値の謂いだが、力で善を押しつけることで、それを受け取る者の価値評価能力が破壊されるからである。しかし、そんなことをすれば、受け手がそれを善きものだと感じる可能性がなくなってしまう、定義によってそれは善でなくなる。「力で善を実現しようとする試みは、ある人の目を抉るかわりに画廊を与えるようなものである」。これらに対して、客観説のみが客観的現実の評価から善を定義できる。善は、発明されるべきものではなく発見されるべきものである。そして、それを行うのは理性である。こうした客観説と整合する社会システムとしては、有史以来、個人の所有権を認め個人が価値を認めるものを自由に取引する資本主義以外には存在しない。そして、このことが理解されていないのは、道徳的価値の本質を明らかにすべき哲学が病んでいるからである。(ibid., 12-16)

以上の議論からすでに明らかであろうが、形而上学、倫理学、社会理論(政治経済論)からなるランド思想の三層体系の最後の部門においても、理性が中心的な役割を果たす。「客観主義」という看板自体が、理性の働きの重視と表裏一体なのである。理性は三たび首座に据えられているのである。

III.6 資本主義はまだ成立していない

さて、以上見てきたような議論をふまえてランドがたどりつく結論は、「資本主義はまだ成立していない」というものである。これは、ここまでの議論をふまえて冷静に考

えてみると実は当然出てくるべき結論なのであるが、それでも常識的にはやはり驚きに値するものであろう。

かつて資本主義ほど力強く価値を証明し、偉大にも人類を利した政治経済システムは歴史上なかったが、同時にこれほど野蛮に、悪辣に、盲目的に攻撃された政治経済システムもなかった。……考古学者は数千年たった廃墟で壺の破片や骨一本をくまなく探し、先史時代の存在の情報を再構成しようとする。——だが、まだ百年もたっていない出来事が風、洪水、地震などによる地質学的残骸のマウンドより深い地下に眠っている。沈黙のマウンドである。

かくも大規模に真実を消し去り、世界から公然たる秘密を隠し、また理想的な社会システムがかつてほとんど人間の手の届くほど近くにあったという事実を、検閲を課す権力もなければ大きな抵抗の声もないままに隠すといったことは、悪者の共謀では実行できない。賢い者たちの無言の恭順くらいでしか、それは実行しようがない。

資本主義の擁護者といわれる人たちこそ、沈黙および資本主義と利他主義の衝突の回避によって、資本主義が事情聴取も公判も原理・本質・歴史・道徳的意味の公衆への周知もないまま破壊されようとしているという事実に対して責任がある。それは悪夢のようなリンチの形で破壊されようとしている。まるで、盲目で絶望感に打ちひしがれた暴徒がわら人形を見て、中に理想が具現した生ける身体が隠されているのも知らずに、わらが醜く束ねられているというだけの理由で火をつけたかのよう。 (*ibid.*, viii)

この件りが、本の表題『資本主義——いまだ知られざる理想』の含意であろう。ところで、この「賢い者たち」とは、実は古典派経済学者を指す。つまり、資本主義崩壊の責任が古典派経済学者にあるというのである。この点を詳論するためにランドが俎上あげるのが、『ブリタニカ百科事典』のエントリ「資本主義」である。

資本主義 封建制崩壊後の西洋世界を支配した経済システム。あらゆる資本主義的システムの基盤は、人的でない生産手段（土地・鉱物・工場〔強調はランド〕など、資本と総称されるもの）の私的所有者と、自由だが資本をもたない労働者（雇用主に労力を売る）の関係である。……その結果、両階級間に賃金契約が結ばれ、社会の総生産が、労働者階級と資本を持つ企業家階級の間で分配される比率を賃金が定める。 (*Encyclopaedia Britannica*, 1964, vol.4, 839; cited in Rand 1986 [1967], 4)

これはランドにとって納得いかない不可解な説明であるらしい。なぜであろうか。説明は、資本主義を基本的に社会の必要物資の再生産システムとしてとらえており、要するに、資本主義とは資本家が労働者を雇用して再生産を行うシステムだと述べている（実は定義していないが）。これは、古典派やマルクスなどの経済学における通説の再構成であるから、経済学という学問の語り口^{ナラティブ}に慣らされた耳には、これを不可解とする発言こそ不可解に聞こえるかもしれない。しかし、よく考えるとそうでもない。

説明には、矛盾した箇所が一つある。それは「工場」(*industrial plant*)を「人的でない」(*nonpersonal*)としている点である（だからランドはこの語をイタリックにした）。土地や鉱物も、森林を伐採したり地中から鉱物を採掘したり、利用可能にするまでの過程で人の手が加わっているには違いないが、いずれもその作り手は人間ではないから、これらを「人的でない」とするのは便宜的に容認できるとしても、工場がなぜ人的でないのであろうか。蛇足を厭わず言えば、創造論をとるなら天地創造の直後に、進化論をとっても人類が猿の仲間だったところに、すでに土地も鉱物も見られたであろうが、同時に工場が存在した可能性は絶対はない。工場を人間が作ったことなど誰でもわかる。だから、問題は、経済学がなぜこうした説明法をとるのかという点に帰着するだろう。

種明かしをすると、その理由は、説明の中に生産論的関心と分配論的関心が、ある不用意な仕方で混在している点にある。経済学ではふつう生産要素を資本と労働と考える。そして、この要素それぞれの所有者に、生産の成果を売って得られた所得（売上金）が分配される様子（分配論）までを視野に入れたいから、階級間での所得分配の説明が続くことになる。だが、分配論では両階級ともが人的な存在なのに、生産論では資本側が人的でない事物として扱われているのである。土地・鉱物・工場が売上金を受け取るわけがないから、分配論がこれら自体ではなくその所有者を受取人と見なすのは当然である。そして、生産論で労働者側が生産に貢献するのもまた当然である。しかし、ではなぜ資本家は生産への貢献者として扱われないのであろうか。ランドが問うのは、まさしくこの点である。すなわち、生産活動がそれを計画・推進する人間の意図などなしに成立すると見なされること、そして、議論の出発点においていきなり分配できる何かが存在し、社会がそれをどう分け合うかだけが問題とされることである。この結果、人の手と創意工夫をへて初めてそこに存在できる生産の成果を、あたかも聖書の中の「マナ」のように天から降ってきて、社会がただで受け取って分け合えるかのような議論が展開されることになる。彼女は『アトラス』でもゴールトを通してこの問題にふれ、「工場がまるで石や木や泥の水溜りであるかに」扱われると不平を漏らす(Rand 1986 [1967], 4; *do.* 1996, 955; 邦訳 1124)。

ランドが『アトラス』のプロットの伏線を社会主義運動のパロディとして、いわば資本主義運動として設定した背景には、経済分析の「公理系」を基本的に古典派経済学か

ら借用したマルクスが想定したのとは正反対に、単独の人間としては生産に最も貢献しているのに奪い取られる企業家こそ没個性的な人たちに搾取されているという、偶像破壊的なパラダイム転換の意図と、おそらくはきわめて辛辣な皮肉がこめられている。この問題を、「生産論における企業家の人格脱落」(depersonalization of businessman in production theory)と呼ぼう。すでに『アトラス』が衝撃を与える理由が単に筋書のみにあるのではないと指摘しておいたが、その理由が明らかになりつつあるのではなかろうか。筋書にパロディ的ねらいがあるとしても、それが背負っている思想的バックグラウンドは、これくらい根源的で深い層に達しているのである。だから、同作が思想小説といわれるのであろう。

また、前にゴールトの他人との関係性に対する警戒の台詞が、張り詰めた空気の中で述べられると説明しておいた。おそらく、ではなぜ張り詰めるのかという問いに対する答えは、やはり企業家の人格脱落の中にあるだろう。そして、それは同時に『アトラス』の題名の由来も説明する。アトラスとは地図帳でおなじみの名だが、ギリシア神話において世界の西の果てで天球を背負うよう罰された神である。この神が「肩をすくめる」というタイトルをつけることでランドが作品にこめた寓意は、人間の世界を繁栄させているのは自ら才覚を発揮して前人未踏の領野に踏み入った人物たちであり、その他大勢の人たちは日々彼らの恩恵に与って生きているのにそれに気づかず、実際の世の中のしくみを見ると逆に前者が後者に押さえ込まれているから、彼ら才人がストを起こしたら人々は初めて世界の本当のなりたちに気づくだろう、というものである。こうして、執行的な徳を備えた人物が抑圧される社会構造に不満を抱き、それを問題として告発することが空気を張り詰めさせるのである。²¹

21 もちろん、実際にボルシェヴィキに一家の財産を没収されて亡命を選んだ苦難の人生が関係していることは明らかであろうが、作品の意図がそうした個人史だけで説明できると見るのは愚かである。むしろ、文明の現段階に見られる社会関係のあり方やその底にある徳と道徳のすり替えの問題を抉り出そうとする意図に発するものであろう。何よりもまず、企業家をそう呼ばずに「資本家」と呼ぶことによって、この人格が「資本」という「もの」をもつ人として間接的に理論の舞台に登場するので、いきなりこの段階で人格が捨象されやすい条件が整っている。ランドはさかんに「誰の資源か」と反問してみせることで、資源としての資本が所有権を帯びた個人財産であり、誰かが計画的に生み出したものであることを思い起こすよう促している。ただ、この問題にはもう少し複雑な一面もあるので、次注で説明する。

22 この問題を、『国富論』を素材に再検討してみよう。スミスは、生産論においては、現場労働者とともに機械の発明者や学者など、関係者全体を貢献者として挙げているから (Smith 1776, I.1.9; 第1巻 18-20)、企業家の人格は多少は視野に入っている。しかし、分配論(賃金論)に入ると様子が変わる。彼はまず、雇用関係のない時代は全生産物が労働者のものであったとして話を始める (ibid., I.8.2; 第1巻 109-110)。だが、その時代には企業家も労働者も同一人物である。だからどちらで呼んでもかまわないともいえるが、「労働者」と呼べば、あたかも生産物の売上金が分配論的に賃金であったかに響く。しかし、賃労働関係そのものが存在しないから、これはミスリーディングであろう。この問題点にスミスは気づかず、自分自身が誤導されてしまうのである。すなわち彼は、時代が下るにつれて賃金から利潤が差し引かれるようになったかに考えた。そして、のちにリカードやマルクスが議論を継承・発展させてしまった。これが「搾取論」の正体である。しかし、生産への貢献度に応じて分け前を受けるといふ公正の原則が分配論において貫かれていないため、生産論と分配論の間に整合性はみられない。A氏は裕福で、B氏は貧しかった。A氏はあるものを作る計画を立て、自分の出資で完成したが、B氏

さて、ランド独自の概念である「部族主義」(tribalism) についての説明によって、彼女に関する分析を締めくくろう。

ランドの理論構成の方法が「ビルドアップ型のマイクロ先行マクロ敷衍理論」を特徴とするのであってみれば、経済学が社会をとらえるときのそれは、19世紀までの経済学 (political economy) においてはマイクロ理論の未発達を特徴とし、さらにはマイクロ理論の発達を見た現代経済学 (economics) においても、そのマクロ理論とのリンクの不在を特徴としてきたのである。しかし、ランドが求めるのは、営利追求というマイクロな利己心に基づいてこそ社会が豊かになるしくみを説明する経済学である。従って、ランドの経済学批判は、学説史などとおした特定学説の批判ではなく、経済学の認識論的枠組 (または「公理系」)、とりわけ集団主義的な分析手法に向けられることになる。

人間の研究によって社会についておそらく多くのことがわかるだろう。しかし、この手順は裏返せない。つまり、社会の研究によっては人間について何も学べない。人間や社会という実体の自同性を確認せず、定義することもしないまま、その相互関係について学べるわけがない。ところが、それが大半の経済学者が採用する方法論なのである。(Rand 1986 [1967], 6)

ランドは続ける。経済学者は人間が経済学の方程式に合致するという暗黙の前提をおくが、それは実は非現実的なもので、本質的に実践的な学であるにもかかわらず、経済学は抽象的図式にとどまって実在する人間をとらえられない。例えば、靴屋が生活のために靴をつくっていることは誰でも知っているのに、理論上はあたかも社会に靴を提供するために働いているかのように説明する。しかし、これは二重基準にすぎない。ランドは、こうした特徴を生み出すもとになっている基本前提を「部族主義」と呼ぶ (*ibid.*, 2-5)。これは、人間を個人としてではなく集塊として見る観点を批判的に総括した名称

も手伝った。A氏はB氏の貢献分はB氏に支払った。さて、ある年、B氏に分け前が配られる前に誰かがB氏の名をA氏の所有物に書き込んだ。このとき、A氏は泥棒と呼ばれるべきであろうか。

搾取論とは、単なる詭弁である。現実には、企業家が賃金という分配カテゴリーを無から新規に生み出したのであり、B氏も得をしている。世界はいわばつねに「丸儲け」で黒字である。誰も損をした人はいない。賃労働関係が世界を総体として豊かにしたことは、決して否定されてはならない。マルサスの懸念にもかかわらず19世紀以降人口が急増したという事実が、このことを証明している (Reisman 2005)。賃金、それは恩典でありマナである——ただし、人間が生み出したマナである。フォン・ノイマンがいたからコンピュータがあり、その製造・販売会社で人々が働き、その対価たる賃金で暮らせるのである。スティーブ・ジョブズがいたからiPhoneがあり、……。

スミス以来経済学を支配してきた議論のこうした偏向は、「分配論における労働者先取の原則」(the preemption principle for laborers in distribution theory) と呼べる。おそらく、この原則の偏向に最も深刻に翻弄されたのがマルクスであり、彼の説を信じて実行してしまったランドの故国である。「共通善」という名のもとに鉄の諸力を押しつけてきたソ連をランドがかくも毛嫌いし、部族主義から最も距離をおくアメリカに亡命して、その帰結である全体主義を執拗に攻撃せざるをえない理由は、まさしくここにある。

で、「マクロ中心主義」とも呼べるだろう。ただ、おそらく「部族主義」はより歴史的な経験に根ざすもので、ヨーロッパが部族の利害のために個人を犠牲にするという、ゲルマン民族時代に遡る行動様式の残滓を拭いきれておらず、アメリカだけにその克服の兆候が見られるという含みがある。西洋社会を十把一絡げに理解して、西洋では個人主義が確立して日本は前近代的な要素が多く残るから集団主義的だと考えがちな日本人には、こうした主張は蒙を啓くものであろう。

この結果、経済学は自ら矛盾に陥ってしまった。人間科学は人間の研究であるはずなのに、自然科学をまねて、人間を総体としてのみ扱い、挙句の果てに厳密性で勝る自然科学に劣等感を抱いているが、それは個人を忘れた学知の自業自得である。これまでの経済学は、いわば空を見るが個々の星を研究しない天文学、病院を研究するが患者を研究しない医学のようなものである。(ibid., 5-6)

このため、経済学は、資本主義を擁護するふりをするくせに、その実、真の意味での資本主義の成立を阻んでいる。それは、「社会」に関する学であるという意味で「社会」主義の研究にすぎず、資本主義の研究ではない。²³こうして、ランドは、200年以上の歴史を有する経済学をその存立基盤から揺さぶったのである。私たち経済学者は、こうした問題提起を正面から受け止めねばならず、決してそれを無視したり、詭弁的に論駁しようとしてはならない。

ランドの触手は、これほどまでに遠くに及ぶ。むろん、理性の復権を熱烈に唱えるランドの哲学には、反論もありえるであろう。議論の提示の仕方は、決して器用とはいえないような気もする。また哲学の体系書を書かなかったことも問題点として指摘できる。²⁴それに、ランド哲学は、創造的人格を称揚する点でいくぶん英雄主義的な側面をもち、主知主義的な偏向も指摘できる。それでも、彼女が実に建設的で明朗な人間肯定の哲学を打ち出したという事実は否定できないであろう。自己肯定的であるとともに他人否定的ではない対等主義を備え、さらにそれがアメリカ的な自由主義経済思想と不可分な形で結合している点で、ランドの思想は実にしたたかであって、決して思いつきの論理で簡単に論駁できるような安普請ではない。メッセージの核にあるアイデアが単純であることはむしろ見やすい事実であるが、それがかえって思想のもつパワーや根深い浸透力の要因になっている。主著『アトラス』が「聖書の次にアメリカ人に影響を与え

23 ランドのこうした議論は、オーストリア学派の方法的個人主義、および同学派による主流派経済学的方法的全体主義批判と通じ合うものである。ただし、この問題は次回に述べることにする。越後2011末の「参考資料 アイン・ランドの資本主義観に関する覚書」(213-235)を参照のこと。

24 ランドの哲学は、先述のとおり試論に散在しているが、ある意味で『アトラス』が最も体系的である。その意味で、彼女は作家であった(藤森2008)。哲学の試論としては、Rand 1961; 1982; 1990のほか、弟子による Peikoff 1993 を見よ。

た本」とまで言われる最大の理由は、おそらくそこにある。ランド思想の単純さを指弾する者は、自らが知らず知らずのうちにまさしくその単純さによって虚を突かれていることに気づくだろう。

グリーンスパンの思想遍歴をたどるうちに長々とランドについて書いてきたが、それは必要不可欠な迂回路である。若き日のグリーンスパンが、正規の学校教育の枠の外で惚れ込んだのは、人類の精神生活の歴史と現在についての実に気宇壮大な展望を与えるこのような思想であった。

IV 弱点をつくアイン・ランド——グリーンスパンの反デカルト的転回

IV.1 第三者の目から見たランドとの出会い

若き日のグリーンスパンはランドに傾倒し、彼女の思想世界に心酔していた。この事実そのものはつとに指摘されていたが、それは主に、彼がもともとはリバータリアンであったものの、政府の要職に就くと現実に立ち返って昔の自分を裏切ったという論脈で取り上げられてきた。こうした見方には一理あるかもしれないが、それでも一理以上は微塵もない。本稿は、こうした立場を理解しながらも同調せず、周りから見てどうであれグリーンスパン本人はあくまでかつての思想を一貫して奉じていると信じていることを、証拠に基づいて明らかにしたい。問題は、グリーンスパンが転向したかどうか、「一貫性」(integrity)を保っているという信念が本当であるかどうかよりも、むしろこの信念によってもたらされた結果である。

グリーンスパンのランドとの関係の発端と展開は、これまでもっぱら第三者の立場から描かれてきたが²⁵、『波乱の時代』で両者の会話の最も肝心の部分がわかるようになった。とはいえ、ランドの側近の回顧録にもグリーンスパンのそれにはない発見があるので、まずはそちらを見てから、のちに本人の説明に耳を傾けよう。

グリーンスパンのランドとの出会いに最も詳しくふれているのは、心理学者ブランドン(Nathaniel Branden 1930-)の手記である。彼はランドの門下生のうち最も若く、早くからランドと交流していた。彼らはマンハッタンにあったランドのアパートで毎週土曜に集まり、集団主義的な社会理論を個人主義的なそれで置き換えるべきだとの信念を確認し合っていたが、少数派の仲間意識から冗談半分に自分たちを「共同体」(the Collective)と呼んでいた。この共同体に、グリーンスパンがあるきっかけから参加するようになる。

私たちのサークルに入ってきた人物のうち最も興味を引いたのは、アインがはじ

25 B. Branden 1987; N. Branden 1999; Martin 2000; Tuccille 2002.

め毛嫌いした男であった。彼はエコノミストで、カンファレンス・ボードで働いていた。9か月前にジョン・ミッチェルと結婚しており、彼女の紹介で私たちのところへやってきた。背が高くでがっしりしており、髪は黒くて黒ぶちのべっ甲眼鏡をかけ、葬式に行くときのような黒っぽいスーツを好んで着てくるのだった。(N. Branden 1999, 111)。

ランドの側近ブランデンのグリーンズパンに対する第一印象はこれであった。ランドのそれも同様で、彼女はこの青年を嫌って「葬儀屋」と呼び始めた。ただ、心理学を学んでいたブランデンは、じきにこの陰鬱な26歳の青年の中に夢見る気質 (a romantic) を発見し、かつそれを表明するのを恥ずかしがる気質にも気づいた。「伴奏で満足する」が熱心に伴奏しようとする心意気を見抜いたのである。それは、会話の中でグリーンズパンが厳密な論理にかなりこだわることを知ったためである。

当時彼はレッセフェールの支持者ではなかったが、企業活動を根っから支持していた。しかし、論理実証主義者でもあり、それは確実に何かを知ることは不可能であるということを強固に主張するものであった。彼は論理は空虚だ、感覚は信頼できず、確率を高めることくらいしかできないと意見を述べた。「自分は存在するとは思うけど、自信がない。実際、何かは確かに存在するとは信じられないんだ」と言ったのだ。

彼は『水源』を褒め、私たちの思想に強い関心を示した。(ibid., 112)

若き日のグリーンズパンが数学好きだったことは前述したが、朝鮮戦争時代には原子物理学や科学哲学に親しみ、マンハッタン・プロジェクト (グリーンズパンの地元を舞台にした計画であることを示すために強調しておく) に参加した科学者の一部が論理実証主義者であることを知ると、この哲学に魅了されていく (AOT 38; 上巻 57-58)。そして、ランドたちにもその立場を表明したのである。ランドは素朴なモダニストではなくアリストテレス的存在論を核にした哲学的立場をとるため、コントを含む「実証主義」全般にあまり価値を認めない。そして、「よくもまあ彼なんかと話して平気ね」とブランデンに言った。ブランデンは「彼を知的に変えてみせる」と返答した。ランドは「ありえないわね。論理実証主義者ですって。彼とつきあうこと自体不道德じゃないかと思うくらいよ」と答えたが、ブランデンは「まあ見ていてください」と話をつないだ。(N. Branden 1999, 112)

しかし、グリーンズパンは不確実性のもとでは確率論的にしかものを考えられないという立場にこだわっていた。おそらくこれは、カンファレンス・ボードでの仕事が顧客

である大手企業の業績下支えのための経済予測であったことと関係している。この問題をめぐるブランデンとの会話は、紹介に値する。

ブランデン「自分が確実だと思えるものもないのに、どうやって確率を判断するつもりだ？」

グリーンスパン「君は自分が存在すると証明できるかい？」

ブランデン「非存在として返答すればいいのかい？」

グリーンスパン「論理法則を立証してくれ」

ブランデン「〈立証〉という概念は、論理を受け入れていることを前提している。そうでなければ、それにどんな意味がある？」(ibid., 113)

数か月もこんな感じの膠着状態が続いた。ランドは傍観を決め込んでいたが、ある夕の集まりでブランデンはランドに「誰が存在すると思います？」と尋ねた。ランドは「えっ？ やったのね。彼は自分の存在を認めたのね」とたちまち事情を察知し、ブランデンは「彼を〈葬儀屋〉と呼ぶのをやめないといけませんよ。彼は実は非凡な人物です。そのうち好きになりますよ」と返した。(ibid.)

グリーンスパンはやがて「共同体」に迎え入れられ、ランドの大著『アトラス』の草稿を輪読してはコメントするという日々を過ごすようになるが、ランドは確かにブランデンの予感どおりに見方を変え、グリーンスパンを「眠れる巨人」と呼ぶようになる。(ibid.)

実をいうと、ブランデンはこうした時期をへてランドと愛人関係になり、1958年に彼女の監修のもとで「ナサニエル・ブランデン研究所」を開設するに至るが、1968年にランドと決別している。その後、1989年に『最後の審判』(N. Branden 1989)というタイトルで手記を発表したあと、1999年に加筆修正のうえ別タイトルでこれを再刊する(do, 1999)。だから、読書界には、不確実性、確率、存在をめぐる彼らの間での不思議な会話は、グリーンスパンのFRB議長就任直後には知られていたことになる。ランドはグリーンスパンを歓迎するつもりはなかったが、ブランデンのとりなしで彼に引留めの説得を一任し、ついにグリーンスパンが折れたということらしいのである。ただ、一連のやり取りを読んでも、争点もグリーンスパンが説得された理由も十分にはわからなかったというべきであろう。

IV.2 本人の目から見たランドとの出会い

この状況は、本人が『波乱の時代』でランドとの出会いを詳しく紹介してくれたおかげで一変した。ランドのサークルに出入りし始めたのは、ブランデンがいうとおり、グ

リーンスパンが1952年に結婚したジョーン (Joan Mitchell) を介してである。ブランドンが1953年1月に結婚したバーバラが彼女と親しく、またリーンスパンも『水源』を読んでいたのでランドに関心があった。ただ、ランドのサークルの話を妻に聞いていたのに、リーンスパンが実際にランドのもとに出向いたのは、1953年に彼女と別れるころであった。おそらく、家庭生活に不安定感があるため、仕事で数理的なデータ処理に追われて家に帰っても落ち着けずに焦燥感に駆られていたものと思われる。

すでに齢五十に近づいていたランドはこの点を当然のように見抜き、彼が不幸そうだったという。ただ、こうしたエピソードは多分に語り手の視点で綴られているから、リーンスパンの立場も考慮してとらえ直すことで公平を図るべきであろう。まず、印象の多くは外見からの単純な連想にすぎない。内気で言葉数が少ない青年がブランドンの描写にあるような黒ずくめの身なりで利己主義を賛美する自己主張がちな作家のアパートに入れば、いかにもそんな評価を下されそうである。次に、リーンスパンなりには、ランドの思想に魅かれたものの、ランドが「合理性」に認める意味の特殊性からやがて自分が培ってきた世界観との間に思想的対決が生じるだろうと予感して、相手の出方をうかがっていた節もある。

いずれにせよ、問題は論理実証主義と人生や世界の不確実性という点にあった。『波乱の時代』は、アメリカ経済界の長老が80歳を超えてから出した本だが、若き日の出来事を鮮明に回想しているシーンがあるので、紹介しておこう。リーンスパンによると、彼が奉じていた論理実証主義とは、

経験主義の一種である。ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインが切り開き、知識が事実と数値からのみ得られるというのが主な教えである。このため、厳密な論証をきわめて重視する。道徳的に絶対なものなどない。すなわち、価値や倫理、人々の行動様式は、文化を反映したものであって論理に従うものではない。……私の中の数学者が、その際立って分析的な信条を信奉させたのであった。(AOT 39; 上巻 58)

この「道徳的に絶対なものなどない」という世界観は、現代における全般的な知性の動揺を端的に表すものであろうが、クリントン時代にリーンスパンとともに働いた財務長官ルービンも、同様の信条を回顧録の基本コンセプトとし、この点でリーンスパンと気が合ったとしているのは興味深い。

26 彼は回顧録全体のコンセプトにこうした考え方をういた理由を説明している。「この考え方の中心にあるのは、確実だと証明できることは何もないという確信である。近代科学の物理学や化学においても、それは同じだと言われる。つまり、この分野で最もお馴染みの基本原則は、証明不可能な認識と事実についての仮定に基づいているのである」〔強調は引用者〕。それは、ハーバード大学時代の講義に始ま

グリーンスパンは、ランドの知的な面での基本姿勢から始めて、自らのこうした世界観が、彼女の仕掛けた折伏のような尋問で敗北を喫した経験を再現している。やや長い引用しよう。

ランドは分析的であることにおいて確固不動で、どんな考えでも直ちに基本的構成要素にまで分解し、世間話には目もくれなかった。こういう強面ぶりにもかかわらず、会話にのぞむとオープンだと気づいた。彼女は、誰がどんな考えを出してきてもそれを考察対象とし、真摯に価値を見出そうとした。

初めの数回は黙って話を聞くだけだったが、そのうち論理実証主義の立場を打ち明けた。何を議論していたときだったか思い出せないが、何かに駆り立てられて、道徳的に絶対なものはないと主張したのである。イン・ランドはこれに食いつき、「どうしてそういえるの？」と聞き返した。

「本当に合理的であろうとすれば、経験的証拠が十分なければ確信も抱けないからです」と私は説明した。

「どうしてそういえるの？」と彼女は同じ質問をし、「自分なんて存在しないかもよ？」とつけ加えた。

「それは……、答えようがないですね」と私は一步譲った。

「自分が存在しないとでも言いたそうね？」

「言おうと思えば……」

「なるほど。じゃあ、そう話しているのは誰？」

たぶんその場に居合わせていなければ、あるいはもっと正確にいうと、たぶん26歳の^{マス・ジャンキー}数学オタクでなければわからないと思うが、私はこの会話で心底ショックを受けた。私の立場が矛盾していることを彼女がもの見事に指摘したということは、自分としてはわかっていた。

だが、単に矛盾を衝かれたところですよ話ではなかった。私は理詰めで考える能力にプライドをもっており、知的な議論なら誰にも負けないと思っていた。なのに、イン・ランドと話していると、チェスをして初めはうまく指せていたのに、気がつくと急に詰んでいるような気にさせられた。自分がこうだと思っていた多くのことどもが、ひょっとしたらただの勘違いかもしれないと思い始めた。もちろん、私はうろたえているくせに強情だったので、すぐに負けを認めはしなかった。その代わりに、黙り返むことにした。

その夜からランドは、私にニックネームをつけて距離をとった。あだ名は「葬儀

、り、財務省時代の朝食会でサマーズやグリーンスパンと交わした議論で形をなすようになったという。(Rubin 2002, 邦訳6)

屋」だった。一つには私が真面目くさっていたため、もう一つにはいつも黒っぽいスーツとネクタイを身に着けていたためである。あとで知ったのだが、それからの数週間、彼女は人の顔を見ると「ねえ、葬儀屋は自分が存在することに決めたの？」と尋ねていたという。(AOT 40-41; 上巻 60-62)

ランドとグリーンズパンの会話がこうして明らかになったことで、おそらくブランデンの回想の不明点が解明されるだろう。まず、おそらくランドのグリーンズパンに対する第一印象は、単に場違いな人物が紛れ込んできたといったものであっただろう。論理実証主義は客観主義と相容れない。おそらく、出会って間もなくこの会話が交わされた。それによって確認した彼の思想、結婚の失敗という境遇に外見の印象が加わって、ランドは彼を「葬儀屋」と呼び始めた。そして、門前払いを食らわせようと思ったが、弟子のブランデンの説得でしばらく様子を見ることにした。ブランデンは苦勞したが、グリーンズパンが最初にランドとの会話で受けた衝撃はあまりに大きく、彼の説得よりは最初の衝撃ゆえに、あまり間をおかずに自分が存在すると認めるようになった。そうして「共同体」に迎え入れられると、自分の存在も認めない「葬儀屋」を他のメンバーの前で揶揄してみせたというエピソードを、ランドから面白おかしく聞かされた。

ところで、ランドとグリーンズパンのやり取りには、見過ごすのは惜しいような注目に値する点がある。グリーンズパンの金融政策の遠い源流がここにあるとさえ思えるので、その特徴を考察してみよう。

第1に、グリーンズパンが回想した台詞が逐一正しいと仮定してのことだが、ランドの「Don't you exist?」(自分なんて存在しないかもよ?)という否定疑問文は質問というよりは反語的で、同時に字面の反対を結論として共有させるという反語の定則にも従っていない点で一種独特の表現である。これには確かに、「答えようがない」(cannot be sure)だろう。それは、客観主義的な存在への転回にいざなう巧みな誘導尋問である。哲学の玄人が、ある意味でやや粘着質な表現で、20歳以上年下の玄人とはいえない青年を試みにかけているのである。後の日のあの老獪なFRB議長が(若きモーセが?)、未熟(green)なままぐるぐる回らせられた(span)のだ。

第2に、この「存在」をめぐる不思議な会話は、ランドの哲学的立場を論理実証主義との関係で理解するうえで参考になる。外界の対象に注意深い観察の目を向け、感覚にとっての所与から対象の性質を明らかにするのが経験主義である。英米哲学に特徴的なこうした指針を論証手続面でより厳密にしたのが論理実証主義であるが、では一連の分析を行う自分は分析されるのであろうか。そもそも、それは誰であらうか。彼女は別のところで、論理実証主義を批判している。論理実証主義では、知識は事実ではなく言語

に立脚する。だが、その言語は対象と接点をもたないので、知識探求とは言語操作にすぎない。妥当性の基準は便宜的なものにすぎないから、科学者の仕事は実在を知ることではなく、恣意的な知を構築することになる。また、そうするにも次の2点が条件になる。まず、科学者は知識の確実性を要求せず、代わりに「確率のパーセンテージ」を要求し、不可知なものの確率がなぜ計算できるかは問わないこと。次に、価値は科学の対象外で理性は価値を取り扱えず、道徳的価値は主観的選択の問題であって精神ではなく感覚が示してくれると信じること (Rand 1961, 32)。つまり、論理実証主義者は、形而上学をめぐる議論がもつれるのを見てそれを排そうと考え、対象の分析における論証手続を数理化・厳密化した。そのことによって形而上学の問題に答えることを回避した。このため、「存在」のような基本的な問題については、十分な説明をもたらせなかったのである。

第3に、こう考えてくると思い起こされるのは、英米経験主義と対照的な大陸合理論を代表するデカルトであろう。ランドはグリーンスパンに外界の分析以前にそれを行う自分という存在に注目するよう促しているから、それはデカルトの「我思う、ゆえに我あり」における「思う我」に彼を帰着させようとしたのだと理解できそうにも見える。哲学史の通説では、デカルトはこうして思考の出発点として明晰判明な「自己」を見出したと理解されている。しかし、ランド的観点からは、これはお粗末な神話にすぎない。先にランドの「部族主義」批判にふれたが、それを全面的に展開したのは『新たな知識人のために』と題する本においてである。同書でランドは主な哲学者を簡単に取り上げて軒並み批判に晒したが、デカルト批判もまた辛辣なものであった。彼女は、中世に広まった意識の所与を重視する思想を抽象的な思惟能力に乏しいゲルマン的な武人の特質としたうえで、それが宗教的権威による自らの正当化を求めるという図式によって西洋哲学史を説明しようとした。デカルトは宗教的権威を哲学の中に再び導き入れた張本人である。彼は、哲学を数学同様に合理的で論理的だとする一方で、その認識論はアキナス的な「意識の先行的確実性」に訴えるだけのものであった。彼は意識の所与に、それ以上遡行できない絶対性を与え、この気まぐれな所与に外的実在が従ってくれるかのような説を立てたため、哲学を混乱に陥れた。(ibid., 24-25)

こうして、上の会話は「思う我」という所与へのデカルト的転回を促すものではない。本稿ではすでに公理からの自同性哲学の導出プロセスを詳しく見ておいたので、この問題の本質を理解できる。すなわち、ランドによると、デカルトはむしろ「我あり、ゆえに我思う」と言うべきであった (Rand 1996, 969; 邦訳 1141)。若き日の議長は、何も知らないまま巨人の門を叩き、彼女の思想の神殿の手前で裸にされ、「存在」の息吹を吹き込まれたのだ。まず我という「存在」から始め、しかる後に事物を認識せよ。これはランドの公理系のきれいな適用例であって、「反デカルト的転回」とでもい

うべきものである。しかも、再現された会話を見ると、ランドがグリーンズパンにしゃべった台詞は4種類5回しかない。つまり、たった4~5本のパスで相手の陣形を完全に崩し、叩きのめしてしまったのだ。だから、このエピソードは、未熟な青年が大家に震撼させられた瞬間として語ることもできる。しかし、論理実証主義の観点から自分の拠って立つ知的足場を固めようという強い意図をもった青年だったからこそ、このパスの怖さを正しく察知し、その切れ味に、持続するショックという形で反応を示したのだともいえる。グリーンズパンのうろたえぶりの背景には、やはり彼の誠実さがあると考えられるだろう。

IV.3 批判からランドを守るグリーンズパン

この出来事をきっかけに、グリーンズパンは急速にランドに近づいていく。ランドの主著『アトラス』は1957年に刊行されるが、それまでに彼女に傾倒する人たちがランドのアパートでの集まりで輪読し、コメントを加え合っていたという。この「共同体」の顔ぶれは、ブランデン夫妻、ブランデンのいとこアラン・ブルメンソール、バーバラのいとこペイコフ、グリーンズパンとジョーン・ミッチェルら8人である (N. Branden 1999, 114)。ランドは弟子を褒めるとき、週によって相手が変わったというが、最も高く評価していたのは、ペイコフの哲学における才能とグリーンズパンの経済学における才能であった (*ibid.*, 159)。グリーンズパンは、この『アトラス』輪読が進む中で、「興



1955年、ブランデンの妹エレインの結婚のとき。左からジョーン・ミッチェル（グリーンズパンの最初の夫人）、グリーンズパン、ブランデン。後列、ペイコフ、エレイン、夫カルバーマン、アラン・ブルメンソール。前列、バーバラ・ブランデン、ランド、ランドの夫オコンナー
出典：Martin 2000

奮してワクワクし始めたが、誰もが彼のそういう様子を見るのは初めてだった。内気そうにおずおずと、自分の中にある夢見る気質の一面を表し始めた」(ibid., 113)。

こうして、グリーンスパンはランドの世界に引き込まれていく。ブランデンの説明をもう少し追って行こう。グリーンスパンは『アトラス』について、「一読すると……気分が昂揚する」とか「産業によってなすとげられたことの真の意味をあなたほどドラマ化した人はいません。この本は人間の知性に対する讃美歌です。すばらしい」と熱を込めて絶賛した。そうかと思うと、あるときはむしろおごそかに、「誰もこの本を理解できない人はいませんよ。アイン、知性、有能さ、達成をあなたが祝福していることは明白で、それは力強く、反論の余地はありません。……人間の生の基盤に関する解明は、輝きを放つ光が隅々を照らし出したように正確で……精密で……心の中のもやもやがすっかり吹き飛ぶほどです」と論じた。(ibid., 160, 167)

もともと「葬儀屋」だった人物がこれくらい強い反応を示したことに、他のメンバーはさぞかし驚いたことであろう。しかし、そのことがかえって、彼を共同体の中に溶け込ませる結果になったことも想像に難くない。グリーンスパン本人の回想からも、ランドへの傾倒ぶりがうかがえる。

アイン・ランドは自分の人生に安定感をもたらす存在になった。短い間に心が通い合うようになった。いや、むしろ私のほうがランドの心に近づいた部分が多い。……ランドはまったくユニークな思想家で、鋭い分析力、強い意志、原理への忠誠を示すとともに、合理性こそ最高の価値だと強く主張した。この点で私自身の価値観とも一致し、私たちは数学と厳密な思考が重要だという合意に達した。

しかし、ランドの思想にはまだまだ先があった。かつて挑戦を仕掛けてみた誰よりも広い思想的広がりをもっていた。彼女は筋金入りのアリストテレス主義者で、その中核となる思想は、意識とは別個に客観的実在が存在し、それを知ることができるというものであった。だから、自分の哲学を客観主義と呼んだのである。また、アリストテレス倫理学の基本的要素を応用していた。すなわち、誰にも生まれつき高貴な性質が備わっており、この隠れた高貴さに気づくことで自分を花開かせることが人間にとっての最高の義務だという考え方をもっていた。ランドと思想を追求することは、論理学と認識論の優れた講義を受けることであった。私は、ランドの主張にほぼいつもついていくことができた。(AOT 51; 邦訳 76)

21世紀に入ってからのこの回想は、おそらくランド哲学における存在論の重視に基づく論理実証主義に対する批判的姿勢を便宜的に自分の立場に引き寄せていると思われる(特に「論理学と認識論」という表現)。また、それは20代における自分のランドと

のつき合い方が半世紀以上の風雪に耐えて再述されたものである可能性が高い。ただし、「客観主義」の理解は正確である。また、アリストテレス倫理学についても、ランドの弟子としてそのエキスを吸収している。

さて、アメリカで聖書の次に影響を与えることになる『アトラス』だが、満場一致で歓迎されたとまではいえず、辛辣な批判に晒されることもあった。批評家グランヴィル・ヒックスは、『New York Times』紙に「うずもれた才能の寓話」と題する書評を寄せ、凝った文体で同書を酷評した。

このラブレー的大作は、文学的著作というよりはデモ活動のようなものに見える。作品が長いことは、先の尖った角を好き放題振り回して敵の街の城壁をぶっ壊すごとくに、真理（といってももちろん著者の）の敵を粉碎してやれという著者の決意を示すものらしい。文学的には、いかなる意味でも真面目な小説などではなく、強い思い込みを喧嘩腰で情け容赦なくぶつけた作品である。読者の耳の中できなり立て、注意をそらさせまいと頭のあたりを殴りつけておき、読者が屈服したと見ると、どのページでも説教をまくし立てる。本作には、メロドラマ調、説教調の二つのトーンしかなく、いずれにおいてもおよそ限度を知らない。……

ゴルトは理性を賛美し、神秘主義と相対主義を弾劾し、創造的な個人の神聖な重要性を唱える。……

ただ、ランド女史は人生愛を声高に主張するものの、本書が憎しみから書かれたのは明白である。彼女がもつ憎しみの大きさは、『肩をすくめるアトラス』の結末が示している。(Hicks 1957; cited in H. Rubin 2007)

『アトラス』の結末では、ゴルトらの失踪でアメリカが大混乱に陥り、大渋滞とニューヨークの停電のもと、一大パニックが襲う。ヒックスは、作中人物の長大な演説に展開された現状批判と強烈な個性や確信を頭ごなしに嫌ったものと思われる。結びにもその姿勢が貫かれている。

おそらく、自分と多少の善良な知人たちを除く全人類が一掃されるなんていうのもいい考えだと感じる瞬間が、私たちの大半にある。しかし、こうした気分を14年かけて1168ページも書いた著作全体をとおして保持し続ける人物にはあきれ返る。(ibid.)

そんな瞬間は、おそらく一部の人間にしかあるまい。ランドのディストピア的筆致が、なぜかホロコーストを想起させたい²⁷。利己主義者が抑圧を不服に思って社会に

貢献しなくなった結果を、確かにランドは大袈裟に描きすぎたかもしれないが、ヒックスの非難の筆致も、どこか感情に流された色合いが濃く、冷静な感想というよりは勝手な連想を書き連ねた部分もある。これは、批評の域を超えている。しかし、ここで重要なのは、何とこの書評に対して、他ならぬグリーンスパン本人が直接弁護の筆を執り、同紙編集部に次のような投書を寄せたことである。全文を引用しよう。

『肩をすくめるアトラス』は人生と幸福を祝福するものである。正義は確固不動である。創造的な個人、ブレることのない目的や合理性により、喜びと充実が成就する。目的も理性も避け続ける寄生者たちは、死ぬべくして死ぬ。ヒックス氏は「こうした気分を14年かけて1168ページも書いた著作全体をとおして保持し続ける人物に」猜疑心をもってあきれ返っている。この読者は、確固不動の正義を見出した人の人柄を、不穏なものではないかと疑っているわけである。(Greenspan 1957; cited in H. Rubin 2007)

激烈な筆致からは、グリーンスパン自身がランド思想に深く傾倒していたことが見てとれる。のちに政府要人になってからは、彼が一種の折衷主義に傾いたことは事実であるが、ランドに心酔した自らの青春に墓標を打ち立てようとした形跡はなく、むしろ「ランド派エコノミスト」への道を追求することが、2006年にFRB議長を退任するまでの彼の一大テーマであったとさえ思えるのである。

ランドとは、彼女が1982年に他界するまで親しい関係が続いたし、自分の人生に大きな影響を与えてくれたことに今でも感謝している。彼女に出会うまで、私の知的世界は狭かった。それまでの仕事はみな経験的で数字をベースにしたもので、価値を追求するものでは全然なかった。高い能力を要する技術的分析をしていたが、それだけであった。論理実証主義により、歴史と文学を軽視していた。……ランドは私に、人間と人間が抱く価値、人間がいかにか仕事をしているか、何かをしたらそれはなぜか、何かを考えたらそれはなぜか、こうしたことを観察するよう促した。これによって、身につけていた経済学のモデルをはるかに超える広大な世界を見渡せるようになった。社会がどう組織化され、文化がどんなふるまいを示すかを学び始めたし、経済学と経済予測がそういう知識に基礎をもつことがわかるようになった。文化が異なれば、物的な富もまったく別の方式でつくられる。こうした見方は、すべてアイン・ランドによって自分のものにした。彼女は、私がそれまで背を

27 ヒックスはジャック・ロンドンの『鉄の踵』(London 1908)などの作品を挙げ、『アトラス』の描写がそれらに描かれたホロコーストを他愛ないものに思わせるほどだと述べている。

向けていた広大な領域に連れて行ってくれた。(AOT 52-53; 上巻 77-78)

先にグリーンズパンが論理実証主義について「道徳的に絶対なものなどない。すなわち、価値や倫理、人々の行動様式は、文化を反映したものであって論理に従うものではない」と述べていたことを思い起こそう。このような見方においては、文化は所与でありそれ以上遡れない実体である。ところが、ランドとの出会いのあとは、人間のミクロな行為から社会のマクロな帰結に至るプロセスを想像できるようになったと述べているのである。グリーンズパンは統計数値の背後に、生きて動いている人間を嗅ぎとれるようになったと回想しているのだ。つまり、現代経済学の用語でいう「ミクロ的基礎」を獲得したのである。しかし、それは彼がルーカスになったことを意味するわけではない。以前から行っていた統計や議会資料を駆使した綿密な調査の対象を、個々の産業から経済全体に拡大する道筋を見出し、このことによって景況判断が正確になり、顧客の信頼を得るようになる。こうして、ランドが強調した「道徳哲学」を基底部に据え、営利追求という「習慣」のあり方とその帰結に思いをはせるエコノミストとして、他人に真似のできない独自の立場を固めていくのである。

金融政策において歴史的な偉業をなしとげ、まもなくそれにしては一見似つかわしくない帰結を耳にする 2007 年ころのある一日、80 歳を超えた世界的エコノミストが、書斎でキーボードに向かっている。昔を振り返って沈思黙考する中で、彼がかくも肯定的な筆致でランドについて書きとめたことは、筆者には重大な意味をもつと思われる。な



David Hume Kennerly/Gerald R. Ford Library

1974 年、CEA (大統領経済諮問委員会) 委員長就任のときオーバルオフィス (ホワイトハウスの大統領執務室) にて。左から、グリーンズパンの母、フォード大統領、グリーンズパン、ランド、ランドの夫オコナー。
<http://www.nytimes.com/2009/11/01/books/review/Kirsch-t.html>

にしる、ランドとの出会いによって「世界観がすっかり変わってしまった」(AOT 39 ; 上巻 59) と述べているほどなのである。次回は、ランド体験がエコノミストとしての彼のキャリアにどのような影響を及ぼしているかをつぶさに見ていこう。

参考文献

- Arendt, Hannah, *The Human Condition*, University of Chicago Press, 1958. (志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫, 1994年)
- Aristotle, *Ta Meta Ta Physica (The Metaphysics)*, tr. by Hugh Trendennick, Loeb Classical Library, 1933. (出隆訳『形而上学』岩波文庫, 1959年)
- *Ethica Nicomachea (Nicomachean Ethics)*, tr. by H. Rackham, 2nd edition, Loeb Classical Library, 1934. (高田三郎訳『ニコマコス倫理学』岩波文庫, 1973年)
- Batra, Ravi, *Greenspan's Fraud: How Two Decades of His Policies Have Undermined the Global Economy*, Palgrave Mcmillan, 2005. (ペマ・ギャルポ, 藤原直哉監訳『グリーンスパンの嘘』あうん, 2005年)
- Bernanke, Benjamin, *Essays on the Great Depression*, Princeton University Press, 2000.
- Blinder, Alan and Ricardo Reis, "Understanding the Greenspan Standard," August 2005, [http://www.kc.frb.org/publicat/sympos/2005/pdf/blinderreis.paper.0804.pdf#search='understanding greenspan blinder'](http://www.kc.frb.org/publicat/sympos/2005/pdf/blinderreis.paper.0804.pdf#search='understanding%20greenspan%20blinder')
- Beckner, Steven K., *Back from the Brink: The Greenspan Years*, Wiley, 1996.
- Branden, Barbara, *The Passion of Ayn Rand*, Anchor, 1987.
- Branden, Nathaniel, *Judgement Day: My Years with Ayn Rand*, Houghton Muffin, 1989.
- *My Years with Ayn Rand*, Jossey-Bass, 1999.
- Burns, Arthur F. and Wesley C. Mitchell, *Measuring Business Cycles*, National Bureau of Economic Research, 1946.
- Canterbery, E. Ray, *Alan Greenspan: The Oracle Behind the Curtain*, World Scientific Publishing, 2006.
- Fleckenstein, William and Frederick Sheehan, *Greenspan's Bubbles: The Age of Ignorance at the Federal Reserve*, McGraw-Hill, 2008. (鈴木南日子訳『グリーンスパンの正体——2つのバブルを生み出した男』エクスタレッジ, 2008年)
- Greenspan, Alan, "A Letter to the Editor," *New York Times*, November 3, 1957, http://graphics8.nytimes.com/packages/pdf/business/20070915RAND_nyt_greenspanletter.pdf
- *The Age of Turbulence: Adventures in a New World*, Penguin, 2007. (山岡洋一・高遠裕子訳『波乱の時代——わが半生とFRB(上巻)』日本経済新聞出版社, 2007年)
- "My Life Story" (「私の履歴書」), 『日本経済新聞』2008年1月。
- Greenspan, Herbert, *Recovery Ahead!: An Exposition of the Way We're Going Through 1936*, H. R. Regan, 1935.
- Hartcher, Peter, *Bubble Man: Alan Greenspan and the Missing 7 Trillion Dollars*, W. W. Norton, 2006. (中島早苗訳『検証グリーンスパン神話——バブルに消えた7兆ドルと負の遺産』アスペクト, 2006年)
- Hicks, Granville, "A Parable of Buried Talents," October 13, 1957, http://graphics8.nytimes.com/packages/pdf/business/20070915RAND_nyt_atlasreview.pdf
- Kahaner, Larry, ed., *The Quotations of Chairman Greenspan: Words from the Man Who Can Shake the World*, Adams Media, 2000.
- Keynes, John Maynard, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936. (塩野谷祐一訳『ケインズ全集第7巻 雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 1983年)
- London, Jack, *The Iron Heel*, 1908. (小柴一訳『鉄の踵』新潮社, 1987年)
- Martin, *Greenspan: The Man behind Money*, Perseus Publishing, 2000.
- Peikoff, Leonard, "Introduction," in Rand 1982.
- *Objectivism: The Philosophy of Ayn Rand*, Plume, 1993.

- Rand, Ayn, *We the Living*, 1936.
- *The Fountainhead*, 1943. (藤森かよこ訳『水源』ビジネス社, 2004年)
- *Atlas Shrugged*, 1957; Signet, 1996. (脇坂あゆみ訳『肩をすくめるアトラス』ビジネス社, 2004年)
- *For the New Intellectual*, Signet, 1961.
- (with additional articles by Nathaniel Branden) *The Virtue of Selfishness: A New Concept of Egoism*, Signet, 1964. (藤森かよこ訳『利己主義という気概——エゴイズムを積極的に肯定する』ビジネス社, 2008年)
- (with additional articles by Nathaniel Branden, Alan Greenspan and Robert Hessen) *Capitalism: The Unknown Ideal*, Signet, 1986 [1967].
- *Philosophy: Who Needs It*, Signet, 1982.
- *Introduction to Objectivist Epistemology*, expanded 2nd edition, ed. by Harry Binswanger and Leonard Peikoff, Meridian, 1990.
- Reisman, George, "Classical Economics vs. The Exploitation Theory," in *Mises Daily*, January 24, 2005, <http://mises.org/daily/1729>
- Rich, Fontana, *The Poetry of Alan Greenspan: Recorded Rather Painstakingly, but Nevertheless with Adequate Regard for the Author's Central Thrust*, iUniverse, 2000.
- Rubin, Harriet, "Ayn Rand's Literature of Capitalism," *New York Times*, September 15, 2007, http://www.nytimes.com/2007/09/15/business/15atlas.html?_r=1&pagewanted=all
- Rubin, Robert E. with Jacob Weisberg, *In an Uncertain World: Tough Choices from Wall Street to Washington*, Random House, 2003. (古賀林幸・鈴木淑美訳『ルービン回顧録』日本経済新聞社, 2005年)
- Schneewind, Jerome B., *The Invention of Autonomy: A History of Modern Moral Philosophy*, Cambridge University Press, 1998. (田中秀夫監訳・逸見修二訳『自律の創成——近代道徳哲学史』法政大学出版局, 2011年)
- Sechrest, Larry J., "Alan Greenspan: Rand, Republicans, and Austrian Critics," *Journal of Ayn Rand Studies*, Vol.6, No.2, Issue 12, Spring 2005.
- Sheehan, Frederick, *Panderer to Power: The Untold Story of How Alan Greenspan Enriched Wall Street and Left a Legacy of Recession*, McGraw-Hill, 2009.
- Smith, Adam, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of the Nations*, 1776, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Liberty Fund, 1976. (大河内一男監訳『国富論』中公文庫, 第3版, 1985年)
- Sicilia, David B. and Jeffrey L. Cruikshank, *The Greenspan Effect: Words That Move the World's Markets*, McGraw-Hill, 1999. (伊藤洋一訳『グリーンズパンの魔術』日本経済新聞社, 2000年)
- Tuccille, Jerome, *Alan Shrugged: The Life and Times of Alan Greenspan, the World's Most Powerful Banker*, Diane Publishing, 2002.
- Woodward, Bob, *Maestro: Greenspan's Fed and the American Boom*, Simon & Schuster, 2000. (山岡洋一・高遠裕子訳『グリーンズパン——アメリカ経済ブームとFRB議長』日本経済新聞出版社, 2001年)
- 土井省悟「アラン・グリーンズパン」, 『四国学院論集』第119号, 2006年3月。
- 越後和典『新オーストリア学派とその論敵』慧文社, 2011年。
- 藤森かよこ「アメリカ国民作家になったロシア亡命移民女性——アイン・ランドの『肩をすくめたアトラス』」, 『桃山学院大学国際文化論集』第24号, 2001年7月。
- 「アイン・ランドの資本主義観——反ビジネス文学風土の中でビジネスマンを祝福する *Atlas Shrugged*」, 『桃山学院大学人間科学』第35号, 2008年7月。
- 伊藤洋一『グリーンズパンは神様か』阪急コミュニケーションズ, 2001年。
- 小黒国司「米金融政策の新指揮者グリーンズパン(次期FRB議長)——芸術家からエコノミストへの華麗な転身」, 『世界週報』第68巻31号, 1987年7月28日。